

中学校の部 最優秀賞

職場体験を通して

新宿区立牛込第二中学校 三年

森 早 紀

今日の日本の社会は様々な問題で埋めつくされていると思うます。その中の一つに、ニートやフリーターなどといった仕事に就かない人が増えつつあるという問題があると思います。私は昨年、職場体験で病院へ行きました。もともと将来は医療関係の仕事に就きたいと考えていたので、初めて白衣を着たときは、まるで自分がもう本当にお医者さんになったかのように嬉しく、これから始まる多くの体験にとてもワクワクしていました。特に印象に残っていることが、練習用の模型の人間の腕を使って採血をしたり、聴診器を使って血圧を計つたりしたことです。めったに体験できないことだったのです、血が採れたり、脈拍が聞こえたときは感動的でした。

また、いろんな科をまわって、先生方のお話を聞くこともとても貴重な時間で、勉強になりました。けれど実際に、入院している患者さんの足や髪の毛を洗つたり、寝たきりの患者さんを見たりすると、少し怖くなり、イメージしていたものとは全く違っていることが分かりました。病院で寝たきりの生活を送っているおじいさん・おばあさんの中には、声もはつきり出せない人や、自分の痰も自分では吐きだせない人などがいて、自分の祖父母も15年もしたら、こんな風になつ

てしまふのかと思うと、悲しさも我慢しきれなくなってしまった。お医者さんという職業は、常に患者さんの命をあずかっているので、精神的にも大変そうだなと思いました。それに、迅速に的確な判断をくだすことも難しそうだなと思いました。今までは、ただ単にかつこいいと憧れていたお医者さんでしたが、職場体験により別の視点から見ることができ、かつこいいだけではないということがよく分かりました。

また、病院ではお医者さんだけでなく、検査技師さんや事務の仕事をしている人など、裏方の人もたくさんいました。患者さんが安心して病院に行けるのも、そういった人たちが頑張っているからだと思います。私は基本的に自分のことだけで精一杯で、人のことまで余裕を持つて考えられないでの、患者さんの精神面までサポートできるお医者さんたちは、やはりすごいなと改めて感じました。また、いつも笑顔で明るく患者さんと接しているところも、とても素晴らしいと思いました。

私が職場体験で学んだことはもう一つあります。それは仕事をする以前に、人としてどうあるべきかということです。多くの先生が自分の科の仕事についてだけではなく、人生についても熱く語つてくださいました。いくら仕事ができても、人として正しくなければ、それはダメなことです。全ての人との基盤となるのが、人としての自分であると思います。だからまず、中学生までの早いうちに、礼儀やあいさつの台となる部分をしっかりと固めていくべきだと思います。そし

て、それからどんな仕事に就こうかという具体的なことに入つて、いくのが良いと思います。そうすれば、目的や目標、夢などといったものがないままに大人になる人も減り、ニートやフリーターといわれる人もいなくなつていくと思います。

私も時々、働くなんて面倒だなと思うことがあります。働くくらいなら、ずっと一生勉強を続けている方がましとさえ思うこともあります。でも、いつまでも親のすねをかじつて生活しているなんてかつて悪いし、いつまでたつても親孝行もできません。そんな不幸な娘にはなりたくないし、せつかくの人生をつまらないものにはしたくありません。自分が死ぬときに「私の人生、最高に楽しかったー!!」と心から叫んで死んでいいけるくらいの一生にできるように、職場体験で学んだことを活かして生きていきたいです。私だけでなく、世界中のみんながそんな風に思える社会になるといいと思います。

私にとつてのものづくり

板橋区立高島第二中学校 三年
幸 澤 美代子

私は、幼いころから物を作ることが好きだった。そして、それを人にあげることも好きだった。おかげで母親のタンスの中には、私が幼いころに作った作品が、たくさんしまってある。彼女は、それを「宝物」と言つて、大切してくれている。自分が作ったものを人に喜んでもらう。こんなに素

敵なことが他にあるだろうか。この感動が、私が物作りを好きになつた原点だつた。

小学六年生の時、とても感動的な出来事があつた。私は、大好きな家庭科の先生に、卒業の記念にフェルトで作ったブローチをプレゼントしたことがあつた。先生はとても喜んでくださつた。中学一年生になつたとき、下校途中でその先生にばつたり会つた。先生は学校の「離任式」の帰りだつた。なんと、私がプレゼントしたフェルトのブローチを身に着けてくださつっていた。私は、それを見た瞬間非常に驚いた。同時に、大事に使つてくださつていたことに感動した。なんともいえないうれしい気持ちだつた。家族以外の人に喜んでもらった初めての経験だつた。この時、改めて物作りつていなと感じたのだつた。

中学生になつてから「技術」が加わつた。小学校の図工では、主に紙などを多く使つていたので、木材を使って本格的に物を作るのは初めてだつた。私が、技術を通して感じたこと、それは、物を作る大変さだつた。嫌いだつたわけではなくが、木工の作業はやり直しが効かない。いつもいろんなことを注意しながら物を作らなくてはいけなかつた。その代わり、出来上がつたときの達成感はものすごいものだつた。「自分でここまで作り上げてきたんだ」と不思議な気持ちになつた。物作りの面白いところは、まったく同じものが出来ることはないということだ。うまい、へたということではなく、作った人の個性がしっかりと出ているのだから面白い。同じ材料で、同じものを作つているのに、作る人によつていろんな見方があるんだと関心した。完成した作品を前に「私が作つ

たものは、世界に一つしかないんだ。」と思うと、嬉しくて、嬉しいニヤニヤしてしまう。なんて幸せな性格だと感じる。

今までに、技術の授業ではCDラック、ペットライトを作ってきた。その両方が現在、ちゃんと私の部屋で活躍している。ペットライトをつけて、CDラックからCDを取り出し、好きな音楽を聴いていると、とても落ち着く。毎日、ペットライトの優しい明かりにいやされている。正直に言うと、自分が作ったものでこんなに幸せな気分になれるとは思っていない。やはり、私は、物を作ることが好きなんだなと感じている。

私には、技術・家庭科を通して感じたことがもうひとつあった。それは、物を大切にしようという気持ちだ。自分で作ってみて、改めて物の大切さを感じた。今までは、作った人の作りあげる苦労を考えてこなかった。必要がなくなれば、簡単に物を捨ててしまっていた。作った人の苦労や大変さを考えると、悪いことをしていたなど実感することがある。母が毎日作ってくれる食事も、苦手なものがあると残しがちだった。時間をかけて作ってくれたものを残していたんだと悲しくなった。猛省しつつ、感謝しなくてはいけない。

技術・家庭科はなんのために学ぶのだろうか。それは、物を作る技術や知識を学ぶためにあるのはもちろん、物のありがたみを知るためにあるのではないか。普段何気なく使っているものについて改めて考え、感謝するためにあるのではないか。私は、今までの経験でそれを学ぶことが出来た気がする。



私の将来の夢は、物を作る仕事に就くことだ。家庭科の先生が、喜んでくださったように自分が作ったもので、たくさんの人を喜ばせたい。使ってもらいたい。私は、刺繍や編み物をするのも好きだ。一度やり始めると時間を忘れて没頭してしまう。だから、同じものを作り続ける職人にも憧れを持っている。一つのことを究めて良いものを作つてみたい。「買ってよかつた」と思つてもらえるものを作りたい。考えれば、考へるほど、大人になるのが楽しみだ。せっかくだから、ゆっくりじっくり大人になっていきたい。

これから授業で、いろいろな物の作り方や技法に出会うだろう。それは私にとって未知の世界だ。新しい発見があるに違いない。もの作りの幅が広がると思うとドキドキする。新たに学ぶことをたくさん吸収していきたい。将来の夢につなげていきたい。もっと物作りの世界にはまっていきたい。中学で出会つた技術・家庭科という教科は、かけがえのない時間をくれた。物の大切さ、物を作る楽しさを教えてくれたことに、心から感謝し、これから的人生を充実させたい。

中学校の部 優秀賞

職場体験で学んだこと

品川区立小中一貫校日野学園 八年

土屋紗綾

私は「職場体験」という、会社やお店にお邪魔させていた
だい、実際に仕事を体験し、働くことについて学んで來
るというので、「東京電力品川支社」に行きました。
私は、そこで職場体験で働くことについて様々な事を學
んで來ました。その中で、特に大切だと思つた事は三つあり
ます。

一つ目は責任の大切さです。しかしこの責任の大切さとい
うのは、普段の生活からすでになんとなく分かっていました。
ですが、これがいかに働く上で大切なのは、今回、いつも
以上に生の知識を学んで來たからこそ、意味のあるものとし
て理解出来たのだと思います。

私が行つて來た東京電力では、もちろん電気や電化製品を
取り扱つています。一つ間違えば危険な物にもなりえるので
すからミスなんて出来ません。故障が起きれば電化製品を使つ
ている人が多いため、すぐに元に戻さなければなりません。
その上お客様からのクレームにも適切に対応する必要があるので、常に緊張感と責任を持つて行動できなければならぬ
のです。そして、これは東京電力に限らず、働く人に共通し
た意識の一つだと思います。働く人一人一人が会社を動かし

ているのですから、責任を持てないなんて問題外という社会
の常識を私はそこで初めて知りました。

二つ目は知識と賢さです。私は職場体験で会社の人からお
仕事を頼まれました。パンフの袋詰めとか切手のり付けと
かでした。もちろんやる気マンマンで手を抜く事もなく無事
終える事が出来ました。ですが、一つだけ手間どつた作業が
ありました。別に大した事はないくて、ちょっとした機械操作
で、文字の印刷されたシールを作る作業でした。初めての機
械に悪戦苦闘の末、結局手取り足取り教えてもらひながらやつ
とこさつとこ完成にたどり着かせてもらつたといった感じで、
私達はいるだけですでに大変だったのに、さらに余計な仕事
を増やしてしまつたんです。そこでもう嫌な程無知というの
が大変だということを身をもつて学習したのです。そして、
単純な作業でも、賢さがあればより効率良く正確に、そして
確実に仕事を進めていく事が出来る事も身をもつて学習出来
た事の一つです。

最後の三つ目は、仕事が好きだという気持ちと努力し続け
る事の出来る根気強さと強い意志です。普通に生活するには
たとえ何を言おうが、まず衣食住がないといけません。その
ためにはお金が必要です。一生遊んで暮らして行ける一部の
人を除いて、たいていの人は働いてお金を稼ぎます。どうせ
働くなら自分の好きな仕事をしたいはずですから、普通は好
きな事を仕事にするために勉強して会社やお店を目指します。
ですが、全員が好きな仕事をしている訳ではないし、働く
をえなくてしぶしぶ働いている人もいるはずです。そういう
たやる氣のない人が会社につくすはずもなく、かえつて会社

の成長の妨げになつてゐる可能性があり、そうすると会社側からみるとあまり良い人材だとは思えないでしようから、問題が起きる事だけは避けたいとしか思つてないという事も考えられるのです。働いている側も、その仕事自体好きでもないのに根気強く努力し続けるのは苦だと思います。嫌な仕事で人生を削つていくのはとてももつたいないです。ですが

逆に、好きな仕事ならどうでしようか。それなら働く側も苦ではないし、自分や仕事に誇りをもてると思います。根気強く努力する事に生きがいを感じながら自分の能力を十分發揮出来る。そんな仕事がますます好きになれると思いました。仕事が好きだという気持ちが必要な理由はこのことから考えました。

今回の職場体験から、私は仕事や働くことの意味を知り、一つ、とても大事な事が分かりました。私は今、将来やりたい仕事を決めていません。ですが、今やらないといけない事は、好きな仕事をするために、そして仕事を選ぶ事が出来るだけの知識と経験を積むことです。まずは知識と経験がないと話しにならないから。そして徐々に得意な事を伸ばしていくこと。最後に、人間として成長する事です。一人の人間として成長する事は、常にどんな人もなくしてはならなくて、それが仕事をする、つまり社会に出る上で最も重要な事なのだと思いますからです。仕事をするということは社会に出て今まで以上のたくさんの人達と関わり、自分の力で生きる事だと思つています。

職場体験は、私にとってとても素晴らしい経験になつたと心底思います。おかげでその他のいろんな仕事にもとても興

味がわきました。仕事選びは、まだ先ですが、目標をつくつてみたいと考えています。

目指し続ける

目黒区立第三中学校 二年

佐 藤 杏 樹

教室の掃除をする。ほうきで掃けば、ほこりがとれる。落ちていた紙を拾うと、きれいになる。これが本来の清潔さだ。

それで私は満足していた。それまでは…。

「汚した分きれいにするのは、当たり前なんですね。」

美容院エクリのディレクター、Tさんは口ぐせのように繰り返した。

中学二年の初夏。初めて三日間の職場体験をさせていただいた。私が選んだのは美容院エクリ。実はまだ、一回も美容院に行つたことがなかつた私に美容院は新鮮そのものだつた。仕事内容も新鮮だつたが、なんといっても、この一言が印象深かつた。

美容院ではいつも清潔に心がけてゐる。朝の二十分の掃除はもちろん、お客様が帰つた後の鏡掃除、いす掃除。カットの後もすばやく髪を掃く。

「時間があまつた時はとにかく掃除しろと、うちのスタッフには言つてゐるんですよ。」

お客様との信頼関係を築くには、まず相手を安心させることが、それには技術も必要だがスタッフの雰囲気、そして店の

雰囲気も大事だという。

「どこでも磨けば、きれいになるからね。なんなら葉っぱでもふいて。」

私は、ハハハと笑いながら、ふと入口の植木を見た。そういえば、いつもきれいだなと思う。

この店の人は本当に楽しそうだ。それは、ただ単に人にやつてあげるのが好きだけではなく、その人のためと思うからではないかと思う。実際、スタッフの一人が前に自分がフリーターだった時の話をしていた時、こんなことを言っていた。

「バイトをしていた頃、お客様が一人来ると〇〇円に見えるって言っていた人がいたんだけど。それって、なんか良くないなと思うんだ。お金のために仕事しているみたいのが、いやで…」

それはわかる。それに、お客様の方も、相手がどういう気持ちで接しているかくらいわかつてしまうと思う。

その点、ここにはそんな気持ちのスタッフが一人もいないなど気づいた。だって、

「仕事の中でもうれしいことはなにか」

と聞くと、誰もが決まって、

「お客様に喜んでもらえること」と言うのだ。

仕事の合間、Tさんが少し手を休めて「話があるから」と

奥の部屋に私を呼んだ。私は何の話かと驚いた。声が小さかったかな、お茶の出し方がいまいちだったかな、とあわてて考えをめぐらせたのを覚えている。

彼は私に座るようにすすめると、紙を手に話し出した。そ

して、紙に数直線のような線をひき、真ん中に縦線を入れた。その線の右は「大変」、左は「喜び」だ。右の分、左にも線をのばしながら、彼は感慨深そうに説明してくれた。

「少しの大変さなら、それなりの喜びしかないよね。でも、ものすごく大変だった時の喜びは…」

紙から出そうなくらい長い線を左にのばした。なんだかものすごく、わかりやすかった。

「将来、美容師になれと言っているわけではない。でも、そのことは覚えておいてほしいんです。努力しない大人にはなつてほしくないから。」

そう言うTさんを見て、私は見習いたいと思った。将来なんらかの職には就くと思う。その時には、私なりにその仕事の本当のうれしさを実感して、未来の中学生にも同じように伝えたい。

「汚いところをきれいにしても、何も気づかれないけど、きれいなものをピカピカにした時、初めてお客様が感動するんです。その違いをわかってほしい。」

掃除に限らない。美容院ではスタイルリストの技術も求められる。できるだけでは認められない世界だ。

「私も本当、最初はドキドキしたよ。慣れないいうちはね、ずっと立つてするのが、まずきついし。マネキンでの練習もしょっちゅうやってね…」

仕事の裏の苦労をこうやって話してくれたのは、入社三ヵ月の、スタッフの一人。

私達が体験したのは、たつたの九時半から四時…だが、美容院の一日は、まだ終わらない。終業は、私達が帰った後、

六時間近く先の夜中だそ�だ。私が体験の一日目に初めて知つた「ずっと立つてること」に加え、正式に入社すると、陰での練習も入つてくるという。

「でも、やりがいがあるんですよ。」

こう誰もが言う。過酷な日程の中、最上の「気配り」と「技術」を常に意識するスタッフ達。私には一人一人みんな輝いて見えた。

あきらめない。終わらない。最上のものを求めて目指し続ける。

あのあと、仕事中のTさんをチラツとのぞいた。カツトが終わり、手鏡を手に説明をしている。

「あつ、そうだ。こういう時は手鏡を受けとりに行くから、早めに後ろで立つていいんだっけ」

足早に向かう私は、そつと大きな鏡ごしにTさんを見た。その顔は最高に輝いていた。

そして迎えた当日。幼稚園の先生から言われたことは、「人の子と遊ばないで、たくさんの子と遊んで下さい。」ということだった。『よーし、たくさんの子と遊ぼう』と思つた私は、少しドキドキしながら教室に行つた。自己紹介の後は、たくさんの子が「遊ぼう。一緒にやろう。」と言つてくれたこともあり、あつという間に時間がたつてしまつた。泣いていた子もいた。そういえば、私も幼稚園に入った頃、泣いていたのを思い出した。あの頃、幼稚園の門のところで母から離れるときに、いつも涙が出てきたな……。

練習していった紙芝居は、皆、静かに聞いてくれた。あんなにたくさん目の目が自分に集中するのがわかつて、かなり緊張したけれども、大きな声で紙芝居を読み始めるとシーンとなつた。「わあ、かわいい」と、紙芝居を読みながら思つた。

庭で手をつなぎで遊んだのも楽しくてかわいかつた。小さい子と手をつなぐと、手が小さくて柔らかくて、ギュッとぎつてくれる。「おねえさん」と私のことを呼んでくれて、本当にかわいい。

お弁当の時も、話題を自分でさがさなくともどんどん話がはずんだ。隣にいた男の子はお弁当のゼリーを私にくれようとしてくれた。「幼稚園の先生は、毎日こんなにかわいい子たちに囲まれて、毎日楽しくていいなあ」というのが、その日の私の単純な感想だつた。実際、想像していたのよりもずっと楽しかつた。今でも、あの一日の一人一人の顔を思い出す。

幼稚園での職場体験もほとんど終わり、幼稚園の先生方にお礼のごあいさつに行つた。その時、先生のおつしやつた言葉は、大変印象深かつた。先生は、こうおつしやつたのだ。「こ

誇

り

葛飾区立綾瀬中学校 三年

岡 田 泉

職場体験で幼稚園に行くことになつた。「楽しそう」というのが、私のまず思ったことだ。小さい子は、かわいいし、好きだし、学校の授業よりも楽しそうだし……ということで、幼稚園に行くのは楽しみだつた。一緒に行くことになつた友達と、紙芝居を読む練習もした。

の仕事は、命をあずかる大切な仕事です。」と。

この言葉を聞いて、私は、今まで自分が幼稚園の先生の、本当に一部分しか見ていなかつたのだと思つた。「命をあずかる」「大切な仕事」とは——。仕事とは、楽しいだけのものではなかつた。先生は、楽しんでいるだけではなかつた。幼稚園の先生は、ニコニコと優しそうだけど、こんなにすごいことを考えているのだと思つた。小さい子も大人も、一つずつ命を持つていて。大切な大切な命を。

この職場体験で思つたことは、自分の仕事に対する「大切な仕事」と言えるような、仕事に対する誇りを、私も将来持ちたいということである。どんな仕事も、その仕事をきちんととしている人には、仕事に対する深い考え方、誇りがあるのだろう。

たつた一日の職場体験だつたけれども、次の日学校へ行くと、職場体験の話ばかりだつた。私がよく行く近所のスーパー、レストラン、薬局、郵便局、電気屋さん、美容院など、ほとんど私が行つたことのあるところで職場体験は行われた。知つてゐる、行つたことのあるところがほとんどである。そして、どこに行つた子も、「あんなに一生懸命考えて仕事をしているとは、知らなかつたなあ」というようなことを言つていた。例えば、美容院に行つた子は、「お客様にいい気分になつてもらうのが私達の仕事です。」と言われたと言つていた。世の中には、たくさんの仕事があるけれども、一つ一つの仕事に対して、働いている人は、こんなにも考えて一生懸命

やつてゐるのだと思つた。普段の生活も、こうやつて働いている人がいるから成り立つてゐたのだとわかつた。

私も何年か後には、働くことになるだろう。その時、自分の仕事に対して誇りを持ちたい。そして、やはり色々考えて一生懸命に、仕事に取り組みたいと思う。

将 来 の 夢

愛國中学校 三年

横 山 三 紡

私の憧れの夢は看護師だ。幼稚園からの夢だ。私が看護師になりたいと思つたきつかけは二つある。一つは母に憧れていたから。もう一つはあの有名なナイチンゲールみたいになりましたからだ。

一つの理由は、母が看護師という事。私は母の事をとても尊敬している。最初、私は看護師になろうとは少しも思つていなかつたが、ある日、私は病気になつてしまつた。母は心配して病院へ連れて行つてくれた。でも、病状は良くならず母は焦つていた。だからといつて母にとつては焦つてはいらなかつた。母は小児科に電話をしてベッドだけでも貸してもらえないかという内容だつた。母は私を連れて病院へ行つた。すぐ病院に着き、私をベッドの上へ乗せて母が私に注射をしてくれた。この注射で私の病状は徐々に良くなつていつた。病院の人には「お母さんはあなたを救つたのよ。注射をしてもらつていな

かつたら病状は良くなつてなかつたはずよ。だからお母さん
にちやんと感謝しておきなさい。

私は泣きそうになつた。ここまでして母は私の事を心配して
助けてくれるなんて思つてもいなかつたからだ。私は思つた。
「あの時、注射をしてくれなかつたら、今の元気な自分はい
なかつたんだろうな……」と。この時、私は母の事を尊敬し
憧れだした。一番必要な存在だと感じた。だから母の側で働
きたい。心からそう思つた。

もう一つの理由はナイチンゲールにある。私はナイチンゲー
ルの本を読んだ。とても感動した。ナイチンゲールとは、昔
の偉大な看護師だった。家柄も豪華だった。ある日ナイチン
ゲールは看護の勉強をしたいと旅に出た。しかし、勉強をし
て旅に出ていた中に戦争が始まつた。ナイチンゲールは負
傷兵がどんどん送られてくる中、寝る間も惜しんで働いてい
た。でも、患者たちの病状が良くならない。なぜなら、清潔
でないからだ。寝床もボロボロであまりにも病院とは思えな
い場所だつた。このままでは良くないと思つたナイチンゲー
ルは自分のお金等を使って改善し始めた。すると患者たちの
病状も良くなり始めた。良くなつた患者たちはナイチンゲー
ルの事をすごく敬つていた。最後にはナイチンゲールは病に
倒れてしまつた。患者たちの為に頑張り過ぎたのだ。ナイチ
ンゲールは生涯を終えるまで患者たちの事を思つていた。

私はナイチンゲールを偉大だと思った。自分の寝る間も惜
しんで患者たちの事を考えて働いていた。私には絶対無理だ
と思つた。でも、こんな看護師になれたら良いなという思い
はあつた。だから私は決意した。絶対に看護師になつてみせ

ると……。

私はナイチンゲール誓詞を聞いてすごく感じた事がある。
それは『奉仕の心』だ。ナイチンゲールは少しでも患者たち
と同じ心を持つとしているのが分かる。患者たちが喜んで
いたら一緒に喜ぶ。患者たちが痛がつてたら一緒に痛みを知
るというように、ナイチンゲールは少しでも患者たちに近づ
こうとしていた。私はナイチンゲール誓詞を聞くと何か胸に
打たれるものがあつた。それは看護師になりたいという意志
がより自分の中で固まるからだ。私は毎年衛生看護科が行う
戴帽式を見学を行つてている。その時必ずランプを持ってナイ
チンゲール誓詞を唱える。私は感涙してしまう。感涙しなが
らいつも私は思う。必ずあの場所でナイチンゲール誓詞を唱
えると……。

私は今、夢実現の為に日々努力している事がある。それは
毎日苦手分野を復習する事だ。特に数学。数学は一番苦手と
いつて良いほどできない。だが、毎日の復習をする事によつ
て今まで出来なかつた問題も解けるようになり、数学の面白
さがやつと分かつたような気がした。だからこのまま勉強し
て希望の看護科へ進めるように頑張ろうと思う。

私は看護の『看』について学んだ事がある。それは『手』
と『目』でできている事。患者たちは温かい手と心の目で
接していくなければならない。患者たちがどんなに汚なくて
も温かい思いで接するのが看護師だと改めて思つた。心から
患者達に接すれば、きっと患者たちも安心して入院が出来る
と思う。相手の事を思いやる気持ちも何より大切だと思う。
私は思いやる気持ちを忘れずに看護師の道を進みたい。

私がもし看護師になつたら、やりたい事がある。それは患者たちを笑わせてあげる事。病院が怖くて笑えない子供。すごく不安を抱えてる大人達。何か原因があつて笑えないならその原因を取り払つて笑わせてあげたい。この思いは強いものだと自分で思う。だから絶対に看護師になつて、両親やその他私を応援してくれている方達に喜んでもらえるように努力しようと思う。私の夢は自分の為でもあり、両親の為でもあるから……。

画し、生徒が運営をしています。訪問活動でしていることは、主に老人ホームや保育園でハンドベルという楽器を使った演奏や夏祭りのお手伝い、クッキーを作つてプレゼントすることなど、「楽しんでもらう」ボランティアです。

このボランティアをしていて一番うれしいことは、「ありがとうございます」「よかつたよ」「また来てね」と言つてもらえることでとう」「よかつたよ」「また来てね」と言つてもらえることです。

中学校の部 佳 作

マイボランティア

中央区立晴海中学校 三年
鈴木 梨世

近年、世界ではさまざまなボランティアがされていると思います。ユニセフのような国際的なボランティアから自分が住んでいる地域を清掃する身近なボランティアまで、インターネットで「ボランティア」と調べれば、たくさんのボランティア募集のサイトがでてきます。このようにボランティアがたくさん増えたのは、きっとボランティアに対する考え方が変わり、参加する人が増えたからだと思います。私もそのうちの一人です。

ですが、この活動をしていてとても幸せになる反面、とてもつらいことがあります。それは、このボランティア活動に参加してくれる人が少ないとことです。この活動は、私をふくめた三人の責任者以外は、毎回参加者を募集しているので、一定のメンバーがいません。募集をしても、ほとんど毎回同じメンバーになってしまいます。最近は、部活動単位で参加

私が参加しているボランティアは「訪問活動」という私の中学校独自のボランティア活動です。この活動は、生徒が企

をしてくれるところもありますが、なかなか人は増えません。理由はきっとボランティアに対する考え方が少し違うからだと思います。もちろん、参加したくても参加することができます。でも、ほとんどの人が「恥ずかしい」とか「難しそうだからきっとできないや」と考えているのではないでしようか。でもこの活動は相手に楽しんでもらうことが一番なので、演奏などするときも、相手にとつてわざりやすく楽しんでもらうために簡単な曲しかしません。また、あたりまえのことをしているのだから、恥ずかしがるところなんて一つもないと思います。だから私は、もつとたくさんの人々に参加してもらいたいです。

私にとってのボランティアは、感謝する活動です。おおげさかもしませんが、お年寄りの方々が昔働いてくれたから、今の世界があるのだと思いますし、保育園の子供たちがいるから未来があると思います。相手を敬ってこそボランティアになるのではないでしようか。私が参加しているボランティアでなくとも、地域清掃だったら、その町に感謝こめて清掃をすればいいと思います。相手に感謝をすれば、相手からも感謝されます。とても気持ちが温かくなります。

私はこの気持ちをより多くの人に知つてもらいたいです。自分自身にあつた身近なボランティアに参加してほしいです。一度でも参加したら、今よりきっと心が幸せになると思います。

私はたまたま「訪問活動」というボランティア活動にめぐりあうことができました。中学の間でしかできないけれど、一生懸命、お年寄りの方々や保育園の子供たちに楽しんでも

らえるようにがんばりたいと思います。これがマイボランティアだから。

私の進路

港区立六本木中学校 一年

伊藤珠里

私は将来の夢があります。それは、新聞記者になることです。

新聞記者になりたいと思ったのは、小学校六年生のときです。

小学校での総合の授業で自分の将来について考えさせられたのがきっかけで、新聞記者になりたいと思いました。なんで新聞記者を選んだのかというと、ただ単純にかつこいいからというのが一番の理由だと思います。きちつとしたスツヅツを着て、あちこちに走りまわって取材している姿を想像するだけでも憧がれてしまいます。すごく単純で、簡単な理由だけれど、きっと夢の始まりなんてこんなものだと思います。

でも、私の最初の将来の夢は新聞記者ではありませんでした。動物が好きだから獣医になろうと思つたり、おかしをつくるのが好きだからパテシエになろうと思つたりしてきました。でも、その夢たちを長く追うことはできませんでした。今でもときどき考えてしまうことがあります。「本当に、この夢はかなうのだろうか」、「将来就きたい職業を今決めたとしても、またすぐにあきらめてしまうのではないかだろうか」やつぱり、現実は厳しいと思います。私だけがこの夢を追つ

ているわけではないし、新聞記者になるための勉強もこれからたくさんしていかなくてはなりません。このよきな試練を、私は乗りこえられるのでしょうか。考えれば考えるほど、私の中で不安ばかりが生まれます。

私は、もちろん今まで生きてきた中で、仕事をしてお金を稼いだことがありません。だから、まだ仕事の大変さもよく分からぬし、お金の大切さも、はつきり言つてしまえばよく分かりません。もしかしたら実際仕事をしてみると、「新聞記者」という仕事は私が考へてゐるほど、いい仕事かどうかなんて分かりません。こう考へてみると、私は社会について何も知らないし、知ろうともしていなかつたのかもしれません。

私は、この夏休みを機会に新聞記者について調べてみたり、親に仕事について話を聞いてみたりしました。親の話を聞くと、仕事の大変さや、お金の大切さがよく分かりました。私が考へてゐる以上に仕事は大変で、お金を稼ぐというのがすごく大変なことがよく分かりました。新聞記者という職業に限らず、どの職業であつても大変だということが分かりました。私が、ふだん使つてゐる文房具や食べ物も、頑張つて働いて稼いだお金で買つてゐるのかと思うと、もっと大事にしていきたいと思います。

今まで考へてきて、私が夢を実現するために一番大切だと思つたのは、「夢を追い続ける気持ち」です。どんなにたくさんの夢を持つたとしても、「夢を追い続ける気持ち」がなければ一つ一つ夢は無くなつていきます。もしかしたら、夢が無まま人生が終わつてしまふかも知れません。私自身も、い

くつかの夢を追つてきましたが、「夢を追い続ける気持ち」がなくなつて、あきらめていたのも事実です。それに、今、「新聞記者になりたい」という気持ちもいつかは無くなつて、またがう夢を追い始めるかもしれません。

でも、今はもう真剣に自分の将来と向き合わなければならぬ年齢だと思います。あれになりたい、これになりたいと迷つてゐる場合ではありません。だから、小学生のうちに自分の夢について考へさせられたのだと思いました。

だから今は、「新聞記者」という私の夢を「夢を追い続ける気持ち」をもつて、実現させたいと思つています。そのためには、今は再来年に控えた高校受験に向けて、たくさん勉強しようと思います。

働くことの喜び ↗ 移動教室での出来事 ↗

港区立六本木中学校 一年

菅 原 千 敬

今年、中学校に入学した私は六月に移動教室に行きました。入学したての頃は、校舎のどこに何の部屋があるのかさえも分かりませんでしたが、一ヶ月も経つと慣れてくるものです。新しい友達に、校舎のきれいな学校。毎日が楽しくて、六月にある移動教室も待ち遠しくてたまりませんでした。荷物の準備は三週間前からしていたほどです。

東京を発ち、いざ長野へ！バスの中もとても賑やかで、やっぱりみんなも楽しみにしているんだなあと、感じました。

宿舎に到着。宿舎もきれいで、学園長さんも優しそう。六年生の頃に行つた移動教室とは、また違う味わいでした。一日目はカレー作りや部屋で遊んだり。夜遅くまで友達と語り合つていました。「明日、早く起きられるかな」と心の中で心配しつつも…。

二日目は、車山の登山。自分の限界に近いほど歩きましたが、それ以上に友達との絆が深まりました。一日目も二日目も心が浮き立つことばかり。シャツターチャンスも多く、私が持つていったデジカメがたつた二日間でバッテリーを代えなければいけないほどでした。

そして三日目。一昨年体験済の姉から聞いていた今日の仕事は、これまでの人生の中で一番辛いものだそうです。仕事名は「酪農体験」。牛の世話をします。姉が言うには、信じられないほど臭いとのこと。「そんなに臭くないでしょ。」私はまだ何もわかつていなかつたのです。

「臭い！」私が初めてに発した言葉です。文字通り、息が出来ないほど。しかも、小屋に溜まりにたまつた、その臭い牛の糞を処理しなければいけないので。小屋に足を踏み入れた時、一瞬にして強烈な匂いが私たちに襲いかかりました。これは、体験した人にしか分からぬでしょう。本当にきつかった。この匂いをかいで、倒れそうになつた人が出てきてしまつたほどです。私は、それから鼻で息を吸うのではなく、口で吸うように努力しました。時間が経つてきました。「ストロベリーの香りがする」と言う人が出てきました。「ああ、可哀想に…ついに鼻がやられてしまつたのね」と、心の中で呟きました。その上、その糞の上を長靴で歩くというのです。ま

さに、最悪の事態です。「一日であんな量が溜まるとは、牛もやるのだなあ」と思つてしまふほど。けれど、こうしちゃいられない。早く、しなければ！

しかし、すぐに終えられるほど、甘いものではありません。約七〇人の生徒が一組六人ほどのチームをいくつかつくり、スコップを片手に一輪車に糞を積み、運び出すという作業を一斉に行つても、午前中、午後とかかってしまいました。また、その作業は糞の上でするので、足場が悪く、今にも滑つてしまいそう。もしも、そこで転んでしまつたら全身糞まみれになるのは必定。「あそこで足に体重をかけていれば…」と。当然、常に踏んばることになり、無駄な体力を消耗してしまうのです。もう、こんなやつていられないよ…と、心の中で嘆いていました。今、思い出しただけでもぞつとしてしまいます。こんな作業って一生に一度きりしかないのでは？

けれど、この仕事を毎日こなしている牧場の人たちはどうなのだろう？毎日、あの強烈な臭いの中、大量の糞を片付けているのだろうか？そう考えると、大変だなあとという思いが湧き上がつてきました。でも、そんな仕事を何の文句を言わずに続けているのだから、根気もあるんだろうなあ。私のように、いちいち文句を言つては、この職業はもちろん、他の職業にも就けはしないでしょう。どんな職業でも、どんな仕事でも、根気やヤル気がなければ続けられない。酪農体験を通してこう感じました。ただ、根気とヤル気だけでは、何か足りない気もします。生き生きとしている牧場の人たちを見ていて、きっと、それはやり甲斐なのではないかと思いました。私たちが頑張った結果、牛たちが快適

に、健康に過ごせる。きれいに片づいた牛舎を見た時は、私のようなはじめて体験した者にとつても、それはとても働き甲斐を感じた瞬間でした。

この作業が終わつた後に分かつたのですが、牧場の人たちは毎日、自分たちの手で糞を処理している訳ではなく、機械を使つてゐるそうです。それでは、なぜ私たちは機械で処理をせずに、わざわざ自らの手で片付けたのでしょうか？ それは、働くことの原点、苦しいけれど、頑張つてやり遂げるなどを実感して学ぶためだつたのではないかと、私は考えています。

また、片付けている牛の糞は、そのまま捨てるのではなく、リサイクルをしてゐるという話も聞きました。日光で乾燥させ、それを肥料としてまた採用する。無駄がなく、素晴らしい。それでいて、牛たちが清潔に過ごせているのだから、何の文句もつけられないほど、上手なリサイクルです。

これらの体験をしてみて、私が感じたことは、この体験が、これから社会を築いていく私たちにとって大切な一步だったのではないかということ。何かを思つて仕事を成し遂げる。それこそが、今回の私達が身につけなければならないことの一つだということです。都心から離れ、みんなと一つになつて体験したこの三日間は、今、私にとって、この上なく貴重な思い出になつてゐるばかりか、からの私の働くことの原点になる気がしていきます。

私は、中学になるまで働く喜びを知らなかつた。もちろん、働く人は何人も見えてきた。でも、感じるのは、「いつも、大変そうだな」「頑張つてえらいな」とか、そういうことぐらいだつた。

そんな私が、中学になつて初めて行つた移動教室で、働くことの大変さや喜びと感じる体験をした。何と移動教室の一 日、私たちは酪農体験をしたのだ。朝、牛を牧場まで誘導したり、牛舎を掃除したり、牛の乳を搾つたり。私の日常生活の中ではやらないことばかり。慣れていないのも当たり前だつた。

しかも、牛は何をするにも手がかかつた。もし牛が誘導している途中で止つたとしたら、後ろに回つて背中からお尻の部分を強く押してあげたり、背骨を叩いたりしなくてはならない。そうすると牛は歩き出すのだ。私はこんなことは、牧場の人が説明してくれるまで全然知らなかつた。だから、途中で止まつてゐる牛のちょっと汚いお尻を、教わつたとおりに押してみて、牛が歩きだした時は驚いた。そして、初心者の私でも牛を誘導できたという、ただそれだけのこと無性に感激した。本当に嬉しかつた。

でも、こんなことはまだまだ序の口。酪農体験では、初心者の私が驚くことは他にもたくさんあつた。

初めて働いた一日

港区立六本木中学校 一年

山 田 早 穂

一番は何と言つても、牛舎を掃除することだ。もちろん、私だけでなく、学年全員で手分けして掃除をするのだが、私は牛舎を見た時、正直声が出なかつた。初めて見る牛舎は言葉では言えないほどすごいものだつた。牛の糞の匂いはきついし、文字通り、いたるところが牛の糞まみれで足場もないのである。だが、そんな牛舎を、牧場の人たちは毎日掃除しているということなのだろうか。そう思つた瞬間、思わず、「すごつ」と叫んでしまつた。

しかも、その牛舎の掃除は並大抵ではない。まず、辺り一面糞だらけなので、どこから手をつけていいかわからなかつた。とにかく、班単位で一列に並び、近くの糞をスコップですくう。何度も何度も、気が遠くなるほど回数だ。牛舎はまさに糞の山。糞がない場所がないのだ。当然、すぐうたび、次第に腕が痛くなつて、正直疲れてくる。それでも、糞だらけで汚い牛舎の中で牛が生活するのだと想像したら、このまま放つておいてはいけないと思つた。牛も私達と同じ生き物だから、汚い中で生活するのは、絶対に身体に悪い、息苦しいだろうと考えたからだ。

そして、スコップですくつた糞は、ネコと呼ばれる一輪車に積み込まれ、ほかのクラスメートの手によつて、牛舎の外に運び出される。もちろん、何回も何回も行つたり来たりをしなくてはならない。

きっと、多くの人は私の作文を読んで、大変だと言つても、牧場の人が毎日掃除をしているから、私の話がオーバーなだけだろうと思うかもしれない。でも、決してオーバーではない。現に、張り切つて働いていたクラスメートの男子二人は、

あまりの臭さにダウンしてしまつた。しかも、その一人なんかは、吐いてしまつたのだ。それでも私はなぜか、疲れても、臭くとも、暑くとも、最後までやりたかった。

実は、私が、何が何でも小屋をきれいにしたい理由は、牛の健康のことを考えた以外にも、もう一つある。初めに牛を牧場に誘導している時、手で実際に触れてみた。あつたかかつた。ぬくもりという感じだろうか。そのうえ、牛の模様はいろいろあつて、中には見たこともない雲の形もあつたりした。一つの絵になつたりしていたのだ。また、赤ちゃんがいる牛もいて、見ているだけでも興奮したのだ。

どの牛もかわいかつた。そんな牛たちのために、私達は今、掃除をしているわけで、だからこそ、最後まできれいにして喜んでもらいたいと、心の底から思つたのである。

みんなで協力して、牛舎がすっかりきれいになつた時、私はすごい汗をかいていたが、その汗の中でも、なんか私自身の気持ちもすつきりした。「達成感だろう」と先生は言つたけど、そんな難しいことはわからない。ただただ、私もクラスの誰もが、なんか晴れ晴れした顔をしていたように思う。多分、牛も喜んでくれたと思う。

そして、働いた後に飲んだお茶がサイコーだつた。何故かいつもより、美味しく感じられた。お茶は好きでも嫌いでもなかつた私がたつた一杯のお茶に感激してしまつた。私はお茶を一気に半分くらい飲みほし、疲れが跳んだ気分になつたのである。

実は、牧場の人達は、この仕事をスコップでやるわけではないそうだ。機械を使うらしい。「え！」と一瞬驚いたが、そ

れでも人間だけの手で、体だけを使って行ったことに、私はとても満足しているのだ。私達はこの体験を通して、実感として、自分で汗をかきながら働くことの大変さと喜びを知つたのである。

今回の体験では、私自身、もう一つ得たことがあつた。それは、牛の糞を発酵させると臭い匂いがしなくなり、温かくなつて、土みたいに「さらさら」になつていることを知つたことだ。これを、肥料に使えることがまたすごい。人間は生きるモノたちの一つの輪の中に居ることを実感した。この中に昆虫もいるそうだ。ということは、その輪の中では、虫も人間も牛もみな平等であり、仲間だということなのだろう。

私は、働くことで、大変さや喜び以外にも何か大切なことを学んだ気がしている。それは、学校や家庭の生活など、もちろん、教科書の中からも学べないものだろう。そして、だからこそ、そんな貴重な一日を与えてくれた人達に感謝している。

「仕事をしていて一番嬉しいことは何ですか。」

「子ども達が楽しい嬉しいと全身で感じ、生き生きとしている姿を見る時です。」

と先生は、お答えになりました。子どもの喜びが、自分の楽しさや嬉しさと感じる先生を素晴らしいと思いました。また、先生はまだ十分には言葉で表現できない子どもの喜びを生き生きとしている姿から見つけては、自分の喜びと感じていることが素晴らしいと思いました。

中学二年生の職場体験では、ぜひ、自分のお世話になつた保育園に行きたいと思っていました。だから、本当にその保

育園にいけることが決まつた時は、とても嬉しかつたです。指折り数えて楽しみにしていた職場体験の前の晩、私は夜中に起き、わくわくして寝られなくなりました。それから、まだ暗いのに

「朝だ。」

将来に一步近づいた職場体験

新宿区立牛込第二中学校 三年

前川道子

私は小学校に入学した頃から保育士になりたいと思つていました。その気持ちは、ずっと変わることはありません。両親がとも働きだったので、小さい頃の私はとても長い時間を保育園で過ごしました。両親は朝七時半に私を保育園に

預けました。そして、お迎えは六時でした。私は、赤ちゃんの時からずっとそんな毎日を送つていたそうです。その保育園で、私は先生方からたくさんの愛情をもらいました。特に、三才から六才までお世話になつた先生には、今でも感謝しています。そして、時々手紙を書いています。その先生は、私にとってあこがれの人で、私は将来その先生のような人になりたいと思っています。

中学一年生の時、総合の学習で身近な人の職業調べをしました。私は、迷うことなく、その先生にインタビューをお願

と叫んで間違えて飛び起きてしまったくらいでした。

私が職場体験で学んだことは、子どもといつも笑顔で接することです。子ども達は、とてもかわいかったです。子ども達の高さにいれば子どもは落ち着いてくることも分かりました。

私は、二才児と四才児のクラスに入らせていただきました。二才児クラスの子どもたちは、言葉ははつきりしていないのに、自分の体で一生懸命に表現しているところがとてもかわいらしかったです。先生方は、そんな分かりづらい言葉でもきちんと理解して対応してあげていました。私も将来は子どもの言葉にならない言葉を分かつてあげられる保育士になりたいです。

また、子どもたちが、すべり台をする時、先生方は後ろでそつと支えてあげていました。この繰り返しで子どもたちはだんだん自分ですべれるようになっていくんだなあとthoughtしました。

四才児クラスでは、自分から縄跳びに挑戦して、うまくならないとしている子どもの一生懸命な姿が心に残りました。一生懸命がんばっている子どものそばにいて、とても幸せを感じました。

四才児クラスの先生は、子どもたちの「出来た。」を見つけるのがとても上手です。いつしょに遊んであげながら、たくさんの「出来た。」を見つけて、子どもといっしょに喜んであげていたことが心に残りました。

子どもたちは、おもちゃを取り合ったり、人と競争したりする心から、よくけんかをしていました。私は、先生が間に

入って話を聞き、仲良くする方法を教えてることに気づきました。

私にとって職場体験は、最高の思い出です。私は、幸せなことに自分が子どもの時お世話になった保育園で、最高の思い出をいただきました。

私もまた、将来は自分が子どものときにしてもらつたように、子どもたちに本当の親のように愛情をそそぎ、夕方無事に親にかえす保育士の仕事をしたいと思います。子どもたちを悪い時は叱り、よい時はたくさんほめる温かい保育士を目指して、がんばっていきたいと思います。

今年私は受験生です。高校は保育士の資格が取れる大学の附属高校を目指しています。その高校に入学するために、勉強をがんばっています。そして、保育士として必要なピアノもうまくなるように一生懸命練習しています。親戚の赤ちゃんのお世話もたまにしています。

高校生活では充実した日々をおくり、少しでもすてきな保育士に近づけるようにがんばりたいと思います。保育園は子どもが一日のほとんどを過ごすところです。私がたくさんのことを学び、豊かな人間になることによって、子どもたちも豊かな生活をおくることができます。だから、私は、これから一つ一つのことを心をこめて学び、しっかりと身に付けていきたいと思います。

子どもたちは、おもちゃを取り合ったり、人と競争したりする心から、よくけんかをしていました。私は、先生が間に

技術の授業で学んだこと

新宿区立牛込第二中学校 三年

星 有 莉 彩

私の家には、技術の時間に作った作品が、それぞれの場所に置かれていたり、しまわれています。技術の授業では、自分の身近にある「もの」を作ることで、その作り方がわかつたり、実際に作つてみることで、「作る」ということの難しさを知ることができます。

私は、中学一年のときに、本立てを作りました。本立ては、今までに作った経験がなく、本立てのデザインから、自分で作つていく授業がはじまりました。私は、本立ての両端は、本の表紙が見えるようなデザインにしたいと思ったので、ちょうど、アルファベットのL（エル）のような形のデザインにしようと決めました。その後、木材の部分部分の長さを測り、木を切つていく作業に移りました。長さは、誤差がなく、左右対称になるために、何回も長さを測つたのを覚えていました。私の本立てのデザインはL（エル）の形だから、木を切るのも早めに終わるのかなあ、と単に思っていました。ところが、他の人たちは、長方形の形を基本に、木の角をとったデザインが多かったため、私よりも切り終わるのが早く、私がまだ木を切つているときに、その後の作業のヤスリがけや絵を書いたりする作業に移る人が多くなりました。私のデザインは長方形からL（エル）の形に切り、角をとらないデザインです。だから、逆に、角だけをとるデザインよりも、切る面積

が多かったから、時間がかかったのかなあ、と思います。私は、前からシンプルな本立てがほしかったので、技術の授業で作る本立てはシンプルな本立てにしようと思い、絵や色は付けないことにしました。だけど、その分、ヤスリがけをたくさんやろう、と思いました。直線の部分が多いデザインなので、みがけばツルツルになるなあ、と思い、ヤスリがけをたくさんやるよう努力しました。ただみがけばキレイに、そして、ツルツルになるのではなく、木の表面がデコボコにならないよう、均一にヤスリをかけることも重要だということを知りました。次の作業の組み立てのとき、くぎを使つて組み立てる前に、一度くぎを使わずに、手でおさえながら完成の形に組み立てました。間違つて組み立ててしまつたとき、ショックが大きいと思ったからです。それからくぎを使って組み立てました。中にしきりをつけるときのくぎ打ちは、木がずれてなかなか打てませんでした。そして、最後に、ニス塗りです。全体にまんべんなく塗ることができるように気をつけてニスを塗りました。このとき、ベタベタにつけすぎるのではなく、ちょうどいいくらいの厚さにニスを塗るように注意して塗りました。出来上がつた本立てを見て、自分のデザインした通りの本立てが出来上がっていて、うれしかったのを覚えています。私は、中学三年になった今も、中学一年のときに作った本立てを使つています。デザインした通り、本の表紙が見えて、何の本が入つているのか分かるような本立てになりました。

私は、授業で本立てを作つたから、それなりの時間がかかるたけれど、本立てを作ることを仕事としている人は、もつと

早い時間で何個も作ることができるんだろうなあ、と感心します。人の好みに合わせて作る本立てやどんな人にでも使いやすい本立てなど、デザインにも工夫していると思います。

「もの」を作り上げる大切さと共に、時間配分についても考えることができる技術の授業だと思いました。

人生の大きなヒント

新宿区立落合中学校 二年

岩屋友理

世間では仕事と呼ばれている言葉だが、私にとって仕事とは「仕事」という単語でしか聞いた事がなく具体的な内容を知らなかつた。それどころかまだ先の話であると深く考えようともしなかつた。今回の職場体験で仕事の一部を知ることができたと思う。

私が職場体験をさせて頂いたのは、飲食店「ミスターードーナツ」である。飲食店は私の希望だつた。なぜなら私は人と話したり世話をすることや料理を作る事が好きだからである。体験初日、最初に教わったのはあいさつであつた。あいさつはお客様に快く食事をしてもらうために重要なことだと思ふ。そのためには、元気で明るい声と笑顔が大切である。中でも気を付けたのは、お礼の言い方であつた。お礼には二種類ある。一つはお客様がトレーなどを持つて来て下さつた時に使う「ありがとうございます。」もう一つはお客様がお帰りになる時に使う「ありがとうございます。」である。ほんの数文字違うだけでお客様に不快な思いをさせてしまうのだから大変である。店員さんはこのような細かい所にまで気を配つ

劍にやつていてると思うし、木を切るのもスペースと、どんどん切れるのだと思いました。ヤスリがけも、頭の中で順序よく、どことどこをやすれば平らになる、と計算しながらやすつたり、ニス塗りも、常にどこを見ても均一に塗つてあると思うと、すごいという言葉以外、できません。実際に、「もの」を作ることを仕事にしている人は、作業ごとに時間をかける配分も決まっていて、その通りに仕事ができる人なのだと思います。私の「もの」を作る場合は、例えば、ヤスリがけだつたら、ヤスリが全部かけ終わつたから、といつて次の作業へ移るけれど、職人の方の「もの」作りは、何分間ヤスリがけをやつたら、次の作業へ移る。という風に、全体のどれくらいの時間をこの作業、というように効率よく進めていくのだと思います。私は、新聞の記事で、「もの」作りを仕事をしている人の記事を読みました。そこには、「モノづくりは一生涯、修業です。」と書かれていました。私は、本立てが自分の思つた通りに出来上がって、うれしくなりました。でも、「もの」作りの職人の方は、自分の思つた通りに出来たから完成ではなく、もつといいものをお客様に、という気持ちで、よりよいものを多くの人に使つてもらえるように、日々修業しているのだと思います。

「もの」作りをしたことによつて、私も普段の生活で、何分間はこれ、何分間はあれ、というように時間配分をしつかり

ているのだからすごいと思う。そして、普段利用している店がこのような気遣いをしていることに感謝した。また、お客様からも「ありがとう」と言われることがあった。この言葉がとても新鮮に感じた。この時、人から感謝されることがあつた。この言葉がどんなに素晴らしいか実感した。あいさつには人の心を動かす力がある。それは自分自身によつて良い方にも悪い方にも変えることができる。これは普段の学校生活でも言えることだ。

私は職場に必要なものは二つあると思う。一つは、お客様とのコミュニケーションである。一番大きく関係しているのはあいさつだと思う。そして、お客様の事を第一に考え、笑顔で目を見て話すこと。しかし私達だって同じ人間である。間違いをしてお客様に迷惑をおかけする時もある。そんな時は素直にあやまることがある。これは職場だけでなく、普段の生活にもいえることである。

二つ目は仲間とのチームワークだと思う。私はこの店のチーフワークの良さに感動していた。ある人がドーナツを作り、ある人はドーナツをつめ、会計し、またある人は食器がなくならないように素早くお皿を回収しているのである。この大した事じやない様に見える作業は實に深い意味があるので。ドーナツを作る人は何が売れているかを目で確認しながら微妙な調整をし、また別の人気がお客様に提供する。これが一つのサークルになつて動いているのだ。もしこの中の一つでもつまずいてしまつたらバラバラになつてしまふのである。だから責任重大なのである。しかし仲間とは支え合うものであると思う。職場はけつして一人ではない。そのことに私はい

そがしいながらもあたたかさを感じた。それと同時に、人生はたくさんの人々に支えてもらひものと思つた。そして、支えてもらうばかりでなく、私も誰かを支えているのだと思う。そうして支え合う事で世の中、うまくいっているのであると思ふ。仕事も、人付き合いも。

職場体験二日目、一日目とほとんど同じだった。ところが、一日目と二日目では仕事を終えた後の気持ちが全く違つた。一日目はただ疲れたという気持ちしかなかつたが二日目は、達成感が強く残つていた。

今回の職場体験は、これから私の人生に大きなヒントを残した。また、将来このような大変な事をするという事に不安と目標ができた。その目標とは、人との交わりがある仕事につくことだ。そしていつまでも支え合う気持ち、あたたかい気持ちを忘れないでいたい。

今、思うこと

新宿区立落合中学校 二年

関 莉 和 子

私にとって「働く」ということは、まだ先のことですが、就きたい職はいくつかあります。私は小学生の頃から外国に興味がありました。沢山の国の中で、韓国の文化や言語には特に心をひかれ、独学で勉強しています。将来は通訳や翻訳など、外国人人と交流をもつ職に就きたいと思つています。今回、職場体験で私が体験させて頂いたのはスーパーです。

普段、学校ではできないことを体験できるので楽しみでした。また、初めて「働く」ということに対し、失敗しないだろうか、足手まといにならないだろうか、と不安もありました。

そんなとき、ふと「あなたは今どこにいますか」という言葉を思い出しました。

小学生の頃、担任の先生に投げかけられた言葉です。「言われたらできる、言われなくともできる、周りが考えていることより上のことができる、人のために一生懸命に何かができる、この中であなたは今どこにいますか」中学生の今、「言われたらできる、ということは当たり前です。ですから、言われなくてもできる、周りが考えていることより上ができる」ということを目標にしようと思いました。

職場に着くと、まずエプロンを渡されました。エプロンを着けると、気が引き締まったような気がしました。次に、職場の方々に挨拶をしに行きました。野菜、肉、お惣菜など、様々な部屋を回っていると、見えないところで大勢の人が協力していることを改めて感じました。

午前中、私はキュウリを袋につめる仕事をしました。キュウリを三本ずつ袋につめ、袋の口をねじってテープでとめます。一見、簡単そうな仕事に見えますが、太いキュウリばかり選んでしまうと、細長い袋に入りません。長いものばかり選んでも、袋の口を閉じにくくなるので、慣れるまでは大変でした。午前中の一時間三十分で、十箱分のキュウリをつめ終えました。

午後は、茗荷、生姜、ピーマン、パプリカをつめました。キュウリと違い、重さを計らなければならないので手間取ってしまいました。さらに、午後は値段のシールも貼りました。

袋を並べたとき、お客様が値段を見やすいように、中央よりやや上に貼るなど工夫しました。ただ同じ作業を繰り返すのではなく、物によって、つめ方やシールの位置を工夫することも、大切なことだと思います。

勤務時間

を終え、周りの方に「ありがとうございます」と言つてくれました。「お疲れ様」という言葉に、何故かいつもより深みを感じました。

職場体験を通し、人の役に立つことで喜びを感じ、自分自身が少し大きくなつたと思えるようになりました。また、仕事をすることのやりがいとともに、仕事の厳しさを感じました。両親がどれだけの思いをして稼いで来てくれているのかが良く分かりました。学校の授業では学べない、貴重な体験ができたと思います。

将来、何の職に就くかは分かりません。しかし、どんな職に就くとしても、私は自分の仕事が好きで、やりがいを感じられることができ大切だと思います。好きでもなく、やりがいも感じられない仕事は、慣れに流されるだけで、喜びや達成感を感じられないと思います。今は、自分の好きな職に就けるよう、少しずつ努力していきたいです。これから何年も先のことですが、いつか社会に出て働くときに、今回の経験を活かすことができれば良いと思います。



父の職場

新宿区立落合中学校 二年
中田 将大

僕ははつきり言つて「働く」というものがこれほどきついものとは思つてもいませんでした。僕の父は清掃会社に勤めていて、仕事の内容は大きく分けて二つ、外の清掃と屋内の清掃です。僕はスポーツが大好きで体力には自信があります。どんなに練習がきつても、一度始めたスポーツをやめたいと思つたことはありません。ですが、父の仕事を手伝つた時は「もう、やめたい。」という感情をずっと持ち続けることになつてしましました。

九月十九日、今日は比較的辛くない外の清掃場所十五箇所を回ることになり、朝からため息の連続でした。四件目くらいまでは余裕があつたのに、五件目からはのどもからからに渴ききり、腰も痛くて動けないほどです。腰を伸ばしながら、まかされた仕事が終わつたことを伝えようと、父を呼んだのですが、答えてくれません。不安を抱えながら車の所に戻ると、なんと父の手にはジユースが。「今買って来たんだ。」と言つのです。こんなにきつい仕事の合間をぬつて働いている人のことを考えてくれるなんて驚きました。自分よりはるかに多くの仕事をこなしているのに、なんて父はすごいんだろう、と心の底から思いました。

外の清掃ラスト十五件目では、なんと大きなハチが出てきたのです。切れていた電球を換えようとした時、足もとから

「ブン、ブン、ブン」という大きな音が聞こえてきて、あまりにも多くのハチだったので怖くて足がすくみ、長い間動けなくなつてしましました。
二十日は屋内の仕事が二件だけでした。けれども、二件といえども大変な仕事でした。

一件目の仕事は壁の紙を貼り替える作業です。最初に部屋の壁のクロスを剥がし、新しいクロスの裏面を糊づけして貼るという作業です。この仕事は職人さんでなければできないほど難しい作業です。僕は助手をしましたが、自分でもやつてみたいと思いました。

二件目の仕事は絨毯の張り替えでした。カッターで絨毯を切るのですが、力が必要な仕事で危うく指を切つてしまいそうになりました。絨毯をはがすのが終わり、仕事が一段落ついたところで一回休憩を入れて掃き掃除をし、その物件を終わらせました。

まだ時間が三時間ほどあつたので、屋内一件、外一件の仕事をすることにしました。まず外の仕事の方から回り、インターほんを拭く仕事、掃き掃除などを二十分くらいで終わらせ、次は屋内の仕事です。屋内の仕事はけつこう汚れていて大変でした。掃除機を床の全面にかけたのに、すぐゴミが出てきてしまい、全部きれいに吸いとるまでに時間がかかりました。拭き掃除では、雑巾が真っ黒になつてしましました。しかたがないので、スポンジに洗剤をふくませて磨いて、雑巾で拭くという作業を何度も繰り返しました。三十分くらい続けてやつと部屋全体がきれいになりました。

仕事を終えた後、父と一緒にご飯を食べました。くたくた

になるまで働いた後の食事は格別においしく感じました。おいしそうに食べている僕を父が笑顔で見ています。僕は、こんなに大変な仕事をほぼ毎日、年中無休で行っている父を誇らしく思いました。そして、もっともつと父の仕事を手伝い、仕事とはどんなものなのかを知りたいと思いました。今後の自分の人生に生かせるように。

同時に、自分の趣味や性格を生かせる仕事をこれから探していきたいと思いました。二日間、父と一緒に仕事をして、今まで考えなかつた色々なことを考えました。忙しくて大変な仕事をしながら、時間のある普段考えなかつた、父のこと、自分のこと、自分の将来のことなどを考えていました。仕事の辛さや、その後のご飯のおいしさも、これから僕の人生を支えていくと感じます。とても有意義な二日間でした。将来、自分の選んだ仕事をする日が楽しみになりました。

得たもの

新宿区立落合中学校 二年

畑野愛美

ただ「職業」と言つてもその「職業」には様々な種類があります。お店のお客さんを相手とする職業、食べ物を相手とする職業、そして命を相手とする職業。私が今回体験した職業は、命を相手とする職業でした。
仕事とはなんですか？ そう聞かれても働いてお金が貰え

るものです。以前の私には、それしか言えませんでした。お父さんが夜遅くまで働いて、お給料を貰つて、そのお金で生活して。そんな暮らしが当たり前すぎて知らなかつたことは山ほどありました。しかし今の私なら、その山ほどの内木一本分くらいなら、語れるようになつたのではないかと思いました。

私が職場体験で行つた場所は動物病院です。本当に動物が大好きで、将来はこの手で動物の命を救える人になりたいと思つていたからです。しかし実際にはそんな簡単な話ではなく、まさに生と死の狭間にいるのだということを身にしみて感じました。

一見とても元気そうな茶トラの猫は、交通事故でお腹のまん中に臓器がありません。なでるとゴロゴロと嬉しそうになく、まさに生と死の狭間にいるのだということを身にしみて白茶の猫は、エイズに侵され歯が溶けてしまっています。そして、抗生素質がなくては生きていけません。

彼らは、見た目は普通の犬や猫です。でも本当は、色々なものを背負つっていました。喋ることのできない彼らを助けることは至難の技です。しかし助けることができる的是獣医師だけなのです。それはつまり、全てがその獣医師の手にかかるのです。当たり前かもしれませんのが、私は命を背負つていていることを深く受けとめました。

獣医師の方が、やつていて一番辛いことは安樂死を選択しなくてはいけない時だとつていました。どうにかしてあげたいけれど、もうなすすべがない、そんな時が一番辛いそうです。

私はそれを聞いて、なんだか胸が苦しくなりました。助けるばかりが医者じやないのだと思つたけれど、なにか言い表わせない複雑な気持ちになりました。その時働く事の意味がなんとなく分かつた気がしました。

大人は色々な仕事をしています。私の体験したような医療関係の仕事、お客様と接する仕事、お客様にサービスする仕事。みんなそれぞれ自分のやりたい仕事に就いています。それはすごく大事なことだと思います。確かに、働くことは容易なことではなかったです。本当に大変でした。でもその大変なことは、自分の好きなことならのり越えられると思いました。たった二日間で、たった十六時間で、何が分かると言われてしまうかもしれません。それでもいいです。「おつかれ」の、「ありがとう」のその言葉が支えになりました。やりたい仕事だったので、面倒くさいなんて微塵も思ひませんでした。疲れたとは思つたけれど、私の中は達成感でいっぱいでした。

大人の仕事なんて、一度もしたことはありませんでした。ちらつと見たことはあつても体験するなんてちつとも思つていませんでした。そんな私が職場体験に行って、何ができるのかと思つていました。でも私にもできることがありました。犬のシャンプー、エサ作り、洗いものなどいろいろ体験しました。そして、その中でたくさんのことを学びました。私が一番に思つたことは、ヤル氣があれば何でもできるということです。もちろん、私に治療はできませんが、それ以外のことなら自分の気持ちさえちゃんとあれば、こなせるはずです。やれないと言つている人はやれないのではなくやらないのです。

はないかと思います。そう思うようになれたのは、この職場体験のおかげです。

私はこの二日間で大きく変わったと思います。それは命とふれあつて、自分の夢にさわれたからだけではなく、それぞれの役割や仕事をみて、大変さを自分で体感したからです。今までのよだな甘い考えはなくなりました。どの仕事も大変だということ、それに差などないのだということが分かりました。そして夢に向かっていく勇気をもらいました。

数年後、自分のやりたいことを笑顔でやつている姿が、少しだけ見えた気がします。

物づくりから学んだこと

新宿区立西戸山中学校 三年
伊 卷 由 貴

中学校生活を通して喜びは、たくさんありました。また、ちらつと見たことはあつても体験するなんてちつとも思つていませんでした。そんな私が職場体験に行って、何ができるのかと思つていました。でも私にもできることがありました。が、とても印象に残つているのです。

私は、中学一年の途中から転入してきました。クラスのみんなとは、まだ慣れていない時に、家庭科の調理実習がありました。この調理実習では、ベジタブル食キングというもので、野菜を使つた一品料理を作りました。私たちの班では「ほうれん草の胡麻和え」を作ることになりました。私の担当は、ほうれん草を茹でることでした。しかし、なにもかもが初めてだつたので、ほうれん草を茹でるときふたを閉めてしまい、

茹ですぎてしまったり、また、友達が胡麻和えのしよう油の量を間違えて、味が濃くなってしまったりと、失敗がありました。けれど、みんなで、協力して作ったので、失敗してもおいしく感じました。しかし、この時の失敗は経験となつて今は失敗することなくできるようになりました。

また、実習を一緒にすることでみんなとも仲良くなれました。この時、私は調理での喜びを感じました。また、中学二年の時の調理実習では、ほかのクラスで、作って失敗してしまった「オレンジサバラン」に挑戦してみました。卵と砂糖を入れて、生地が二倍になるまで泡立てるのが、とても大変で、時間がかかりました。なんとこの作業が、「オレンジサバラン」にとって大切なものだったのです。時間がかけて泡立てたおかげで、ふっくらと生地ができ、成功したのです。また生クリームの泡立て方も難しくて、泡立てすぎて硬くなってしまつたりしてしまいました。けれど、生地が、成功しトッピングもうまくいき、上出来でした。丁寧に作ってみたら、上手に出来上がり、味もおいしかったことが印象に強く残っています。また、その「オレンジサバラン」を担任の先生にも食べていただき、「おいしい」と喜ばれ、自分で食べて思うより、人からほめられるととも嬉しかったことも印象的でした。これの体験は、実際作つてみないとわからないことばかりでした。この中学校の二回の喜びを、もっと味わいたいと三年になつて、選択の家庭科をとる事にしました。三年の家庭科の題材は『ゆかたづくり』でした。一・二年の時は調理で喜びを感じましたが、今回は縫い物でした。この時の作業は、個人の作業で、今までとは少し違うものでした。

目標は、夏のお祭りに着ていけるように、完成させることでした。私は、ゆかたぐらい簡単なんではないかと思つていましたが、ゆかたをいざ作つていくとなると、思つたより難しき縫い物は時間をかけて完成させます。最初のころは、縫つても縫つても形にならず早くゆかたができないかと、出来上がりが、待ち遠しかつたです。作業を進めていくと、段々と形がゆかたになつていき、作つていくことが楽しみになつていてました。このことは、一・二年の調理では味わえないものでした。一ヶ月ほどで、ゆかたは完成しました。待ちに待つていた、完成だったので、とても嬉しかつたです。この嬉しさは、長時間かけ、技術を少しずつ覚えながら作つた時の、苦労が込められているからなのかなと思いました。

私は、このことから、物づくりに対する心が、苦労から喜びへ変わつていつたのだと思ひました。また、家庭科だけではありません。技術では、はんだごてを使って、ラジオを作りましたが、中身を作つたので、とても作業が細かく大変でした。しかし、完成して使えるものになると、とても嬉しくなりました。今は、パソコンでコマーシャルのポスターを作つていますが、自分の思うようにならないところが多々あり、色々考えて、自分でも満足できるような作品を作りたいとがんばっています。

このような物づくりを仕事にしている人たちがいます。食べ物や洋服、機械類など様々なものがあります。この物をつくるという仕事は、決して楽ではないと私は思いました。物をつくる人は、技術が必要です。そのような資格も必要な

のです。そして、何より新しい発想が必要です。物をつくりて、お客さんんに使つてもらうという仕事は、厳しいものなんだとと思いました。しかし、厳しいだけではないことも、この中学校の物づくりで知りました。仕事のように、私の物づくりには大きな責任はありませんが、物づくりに対しての気持ちは、同じなんではないのかなと改めて感じました。

私が、家庭科や技術科などの学習で学んだ物づくりは、物を苦労してつくり、そしてその苦労に、花が咲いた時の嬉しさや喜びでした。そして、その完成したものが売り物になり、お客様に使ってもらえたり、「おいしい」といってもらえたことで、次への物づくりのステップとして、続いていくのだと思いました。この喜びを忘れずに、今まで以上に物づくりをしたいと思いました。

「作る」ということ

新宿区立西戸山中学校 三年
太田亜実

私は家庭科の授業が大好きです。なぜなら、私は裁縫や料理が好きだからです。体育やその他の勉強が苦手なぶん、私は今まで「作る」ことから喜びや楽しさ、達成感などを感じ取つきました。だから私にとって、家庭科の授業は格別なのです。

中学三年生で履修できる選択Aの家庭科で、毎年先輩たちがまるで売り物のような浴衣を作つて いるところを見てきて、

私は三年生になつたら絶対やろうと思つていました。そして三年になり、見事私の夢が叶いました。

しかし早速浴衣作りに取りかかつてみると、作業は細かく、小さなミスが後で取り返しのつかない重要なミスになつてしまふこともわかり、慎重になりすぎてなかなか作業が進みませんでした。ロックミシンを使うのも初めてで、最初はうまくいかないことの方が多く、私には浴衣作りなんて無理だつたのかな、と少し落ち込んだ時もありました。でもそんな時思い出したのは、今まで私が裁縫で作つてきたものの数々です。それらを見ていると、「ああ、これを作った時は……だったな」など、色々なエピソードや思い出を思い出し、改めて私にとって「作る」ことの大切さやおもしろさを教えてくれたのです。だから、もう一度頑張つてみようと、この思いを胸にふんぱりました。

前向きになつた途端、急に作業ペースが上がり、浴衣作りを本気で楽しいと思えるようになりました。それから時間が経つのは早く、あつという間に一学期が終わつてしましました。そして私の、私だけの浴衣もなんとか完成させることができました。私はとても嬉しい、家に帰つてすぐお母さんに見せてあげました。するとお母さんは「浴衣なんて作れるなんてすごいわね！ あなたの今までの作品の中でも一番と言つて良いほど素敵よ。」と言つてくれました。この浴衣を作るので、私は様々な感情を抱いてきました。その中で最も強く感じたのは「辛」という感情でした。だから私には、お母さんの言葉はとても心に響きました。

今回の浴衣作りで、私は様々なものを得ることができまし

た。それは、普段とは比べものにならないほど大きな達成感や様々な感情、そして私の精魂のこもった最高傑作、浴衣です。これらが私の心の中で消えてしまうようなことはあります。

ないでしよう。

私にとって「作る」とは何なのでしょうか。今回のことを通して、私は次のように思います。

私にとって「作る」とは、生きていく中で最も重要なことで、作り上げた作品から新しい発見を見い出し、様々な感情を学びること。これが私の生活に無かつたら、今までの私は単なる生き物に過ぎなかつたと思います。

私が自分自身をつくり、磨いていくには欠かせない「作る」という行為を、私はきっと、死ぬまで大切にしていくと思います。そして今、私は「作る」という行為に出会えてよかつたとすごく思います。何もできない私に、一本の光を与えてくれて本当に感謝しています。

私はこれからも、たくさんの作品を作ります。そしてそれらの質やレベルを、どんどん上げていこうと思います。それはすごく大変なことだけれど、あの浴衣を作りあげた今、すごく自信がつきました。なのでこれからも、たくさんの作品や思い出と共に「作る」ことを進んでやっていこうと思います。



地球上に優しい物づくり

新宿区立西戸山中学校 三年

大南桃子

私は、もともと技術に興味があったので、実技系教科の選択で技術を選んだ。選択の時間は二時間続きなので、各教科とも普段はできない大がかりなことを行つてている。技術科では、最初の目標として「動くおもちゃを作ろう」ということで、現在制作している。設計図から材料のことまで、すべてを自分一人でしなければならないのでとても大変だ。先生が唯一の助け船を出してくれたのは材料だけであったが、その材料に今回の制作の真の意味が込められていた。なんと、先生が用意してくれた材料はどれも木の切れ端ばかり。その他にも要らなくなつた「がらくた」の部品や制作キットなどがあつた。つまり、この制作は廃品をリメイクして新たなものを作る、「エコ制作」というわけだ。最初にがらくたの山を見たときはとても驚いたが、意外にも使えるものが多いことに気づき二度驚いてしまつた。私はそんな「がらくた」たちがまたムダにならないようにと、一枚の木の板でいくつものパーツを作ることにした。

私は制作していく中で、材料がムダになつていることの他にも、様々なことに気がついた。それは、材料のこと以前に工具や機械をあまり大切に使つていなかつたということだ。糸のこの刃が何本も折れていたり、机が傷ついてボロボロだつたり、使用後にコンセントがささりっぱなしになつたり。今ま

ではあまり考えていなかつたが、こうして考えてみるとかなりムダに使つていたんだなと少し反省した。私はもっと大切に使おうと決心し、今までより真剣に制作に取り組めるようになった。

私達が挑戦している「エコ制作」は、元が「がらくた」であるがために苦労する点も多い。一番の問題点なのが、既に色が塗つてあつたり使えるものが限られていたりするので、なかなか自分の思いどおりにはいかないということだ。私は作ろうとしていたおもちゃが小さいものだったので、作るだけでも一苦労だ。おまけに、私はあまり上手に工具や機械を使えないので、何度も何度も失敗を繰り返してきた。一つのものを作るのはこんなに大変だったんだと製作する中で改めて実感した。

今回の私達の取り組みは、小さなものであるが、これは「産業」という大きな面でもあてはめられるのではないかと思つた。たつた一つのものをつくるために、たくさんのエネルギーや資源がムダになつている現状がある。もし、この一つ一つのムダをなくせば未来は大きく変わるであろう。その未来の「産業」を担つているのはこの私達である。そう、自分の手で変えられるかもしれないのだ。私は未来を次のように想像する。リサイクルの制度が進み、工場ではリサイクルして製品を製造する。その工場には緑がたくさんあつて、煙が緑によつて無毒化される。そして、エコなエネルギーが開発され、それを使って空には自転車が飛ぶ。他にも「ドラえもん」みたいなものなど、便利で実用的なものが次々に登場する。そんなことは無理だと思う人が大半だと思うが、私は無理では

ないとと思う。なぜなら、私たちの手で作り出せばいいのだから。

今、世界中で「地球温暖化」が深刻化している。このままでは私達の未来が危ういとまで言われている。私は選択技術での製作を通して、「産業」の大切さや地球温暖化について深く考えさせられた。また、ものをつくることの大変さを知ることもできた。そして、地球を救うカギは「産業」にあることも分かった。今の私には一つの製品を大切に使うことぐらいしかできないが、これからは無限に地球を救うことができる。中学で学んだことを生かして様々な取り組みをしていくとともに、私は自分の未来をきっと変えてみせる。これからはあるが動き始めている。私は全世界が「地球にやさしいものづくり」を実行している日が来ることを強く願つている。そのためにも、我が国日本が先駆けて実行するべきだと私は考える。

選択家庭科授業と将来

新宿区立西戸山中学校 三年

七 タ カ オ り

私は、小学生の頃から裁縫が好きで、よくミシンを使ってバックや筆箱を作つて、学校で使つていました。今学校で使つているバックの中にも、私が自分で作ったものがあります。このように、小学生の頃から裁縫が好きだったので、中学校

二・三年の実技の選択授業は二・三年とも「家庭科」を選択しています。

二年生では、「じんべえ」を作りました。小学生の頃は、身のまわりの簡単なものをただ好きで作っていたので、長さをきちんと測つて裁断したり、縫う線をチャコペンで印をつけたりなどはしませんでしたが、着るものを作るので、今回はきちんと測つてやりました。最初のうちは布の裁断作業が続き「つまらないなあ」と思つていましたが、だんだん形になつていくうちに、選択授業が待ち遠しくなつていきました。私はそういう作業のなかで、苦手とするものがありました。ミシンで「縫う」ことです。前にも書いた通り、小学生のころは布にチャコペンで印をつけたりはしなかつたので、その印にそつてまち針をさすのも最初は少し苦戦しました。だんだん上手になつて、まち針が上手くさせても、上手にまつすぐに縫うことができません。先生にやつてもらうと、先生はやはりまつすぐ上手く縫うことができます。私は「なんで先生が縫うと上手くできるのに、私は上手くできないのだろう?同じ布なのに……」と思つていましたが、まだ二年生の時は上手く縫うことはできず、なぜかたまに上手く縫えて「あれ? いつもの縫い方と何が違うのだろう?」と不思議に思つてばかりでした。今はもう三年生になり、三年生になつてから「ゆかた」も作つたので、直線を縫う時は布を引っ張つて縫うと良いということがわかつたので、だいたい印に沿つて縫うことができるようになりました。これもたくさん直線を縫つた成果だなと思います。家庭科も体育と同じように、やればやるだけ力はつくんだなと思います。そして、じんべえは無事

完成し、今は私のパジャマになつています。私の妹は「お姉ちゃんかっこいい!!」

といつてくれます。私は小学生の時授業でつくつたエプロンは少し失敗してしまい、デザインはすごくかわいいのに、使われてしまわ正在ので、今回は失敗せずにちゃんと着ることができよかったです。

二年生の冬からは毛糸で「マフラー」を作りました。私は裁縫は好きだけれど、編物は苦手であまり好きではなく、は毛糸を買ってもらって、少し「やるぞ!」という気持ちになつてきました。まだ私は編物初心者なので、いちばん簡単な編み方で編みました。時間は他の人よりかかったけれど、完成了時は「おお、ついにできたぞ。」と嬉しい気分になりました。あの達成感はいまでも忘れられません。なにか、運動会でいつも失敗していた学年種目が本番に初めて成功したような感じでした。ここまでいようと「嘘だろ?」と思うかもしれないが、私は編物が嫌いで、今まで一回やつたことがあるかないかという状況のなか、自分のちからで、あの長いマフラーを作り終えることができたんだと思うと、これほど嬉しい気持ちになるのです。

編物が終わると、調理実習に入りました。グループを作つて、そのグループで次に作るものを作りました。必修の授業の中での調理実習だと、作るもののが皆同じだつたり、何種類かの中から選らばなければならなかつたり、それはそれで上手な班と、あまり上手でない班が出て面白いけれど、全く違うものを作つて皆で分け合うのも面白いです。いろん

なものを食べることができて、いろんな味が楽しめます。必修の授業の中で調理実習があると、ほとんどの人が喜ぶのは、こういう背景があると思います。また、選択授業だと一気に二時間時間が取れるので、普通の授業の時よりも大きなものを作ることができます。

そして最近三年生で作り始めた「ゆかた」が完成しました。学校の学芸発表会で展示するために写真も撮りました。ゆかたの着付けも習い、帯の結び方も教えてもらいました。これで次からは母親に頼まなくとも、せめて一人で帯を結ぶ手前まではできると思います。近々近所で祭りがあるので、着てみたいと思います。

私は、今までずっと実技の選択授業は「家庭科」をとつてきました。そこで学んだことが二つあります。一つ目は、「じんべえ」や「ゆかた」を作つて学んだ、家庭科もたくさん練習すれば上手くなるということ。二つ目は、「マフラー」を作つて学んだ、達成感。学んだというよりも、感じたという感じですが、これはこれから進路など将来に役立つものだと思います。三つ目は、調理実習で学んだ、「作る」ということ。家ではたまに土日、自分のお昼ご飯を作つたりするだけですが、何人かで作るのはまた違うなと思いました。今回学んだこの三つのことは、どれも将来生きしていく上で大事なことだと思いますので、この経験を生かして、これから的人生何十年、手作りを楽しみ、心を豊かに生きていきたいと思います。

「常識」を学ぶ

新宿区立西戸山中学校 三年

本 澤 恵 璃

家で母親と会話していると、時々言われることがある。「そんなことも習つてないの？ 信じられない。」

である。

これは、家庭科に関すること、料理や裁縫などについて、

私が

「何これ」

などと、ポカーンとしている時に言われる言葉だ。

つまり、母親の時代より、私たちは家庭科について何も学んでいない、ということだ。知つていても知らない、で生きるようでできないことが沢山ある、ということ。

母親の時代と比べると、調理実習や裁縫などの実技をする時間がとても少なくなっている気がする。母親たちがあたり前のように学んでいたことを、今の私たちはあたり前のようにならなくてきてている。

これは実はとても大変なことなのではないか、と私は思う。大人になって、子供ができたときに、子供の健康のために手作りの料理を食べさせなければならないし、保育園などで使う袋を作らなければならないなど、いろいろな場面で家庭科に関することが増えてくると思う。そんな時、料理本や裁縫の本を読みながらやればいいのだろうけれど、それだけでは身に付かないものなどがあると、私は思う。

今私たちは、月曜日から金曜日までの週五日、学校で授業を受けている。しかし、私が小学校低学年の頃は、土曜日も学校の授業があった。土曜日がなくなつた分、いろいろな教科の時間数が減つてしまつた。全体の時間数が減つた分、当然家庭科の時間も削られたと思う。しかし、家庭科は毎日の生活もそつだが、社会の中での「常識」を身に付けるものだと私は思う。たしかに五教科も大切だが、それと同じくらいに家庭科の授業というものも大切なのではないか。時間が少ない、教科書で学んだものを授業で実際にやつてみるということがなかなかできず、手順が分かっても、それが身に付かないということがでてくる。つまり、「常識」がなくなつていくということ。

「常識」がなくなつていくとは、決して未来のことではない。というのは、今現在に、もう「常識」というものがなくなつてしまつていている大人たちや学生たちがいるということだ。

私が一番驚いたことは、お米を洗剤で洗う人がいるということだ。そして、さらに驚いたことは、洗剤の裏側には「お米は洗えません」や「お米は洗わないで下さい」ではなく、「お米を洗う時は、（して下さい）などと、お米が洗剤で洗えるようなことが書いてある洗剤があるということだ。私は、お米のとぎ方を祖母から教えてもらったので、「お米は水でとぐ」というのは常識だと思つていた。だから、このことを知つた時、あらためて家庭科の重要性を感じるとともに、「常識」がなくなつてきた今の世の中が怖くなつた。

「常識」がなくなつてきたというのは、お米の話だけではない。例えば、赤ちゃんのおむつのCMで、よく青い液体が使

われているが、それを見て、赤ちゃんのおしつこは青いと思ひ込んでいる人もいるし、料理番組でよく「塩こしょう」という言葉がでてくるが、これは、もちろん塩こしょうのことである。しかし、これを「塩こしょう」という調味料があると思い込んでいる人もいる。

私は、こんな思い込みはないと思うが、家庭科について知らないことは沢山ある。自分もいつか「常識」のない大人になつてしまわなか不安だ。家庭科の嫌いな人は沢山いると思う。それでも、ちゃんと勉強して欲しいと思う。「常識」のない大人にならないように。そのためには、みんなに家庭科の重要性について気づき、関心をもつてもらいたい。そのため私たちは何ができるのかを考えていかなければならぬのではないか。

手作りの心

新宿区立西戸山中学校 三年
山 崎 直 子

今年は浴衣作りに挑戦しました。昨年に比べ、ミシンも上手く使えるようになり、夏休み前に、完成させることができました。

最近は、安く洋服が手に入ります。また、たくさんの種類の洋服がお店に並んでいます。そんな便利な世の中のために、自分で洋服を作っている人はとても少なく感じられます。私の祖母は、手作り名人。私が小さい頃作ってくれた、い

ちご柄のワンピース。どんなに高級なブランド品にも、どんなに人気の流行品にも、劣りません。なぜなら、私のために一生懸命作ってくれたから。そして、そのワンピースを着たびに、祖母の温かみを感じます。ここに、作る人と着る人との“手作りの心”があるのでないだろうか…。そんなことを思つた中二の夏。私は、自分で洋服を作つてみようと考えました。実際、製作を始めると、布を買いに行つたり、慣れないミシンを使つたり…とても大変でした。面倒だなあ…そんな風に思つたりもしました。しかし、作り終わつた時の達成感は、他の何にも代えられません。自分が大変な思いをして作つた洋服。やはり愛着があるものです。

私の夢は幼稚園の先生。どんな子にも優しく接するあの姿は憧れます。中学生が制服を着るよう、幼稚園生も園服を着ます。また、園服の他にも、絵本入れや連絡袋、上ばき入れ等、様々なものが必要です。また、名前を刺繡するのに必要な針と糸。たつた二つだけなのに、面倒だと思う人は多いです。十年前、名前の入つた園服に身をつつみ、手作りの絵本入れを提げ、母と手をつなぎ、ウキウキしながら門をくぐつた入園式。今、あの頃を思い出すとき、名前の入つた園服も、手作りの絵本入れも一緒です。十年後、私が幼稚園の先生になれたら、子供達の笑顔とともに、名前の入つた園服や手作りの絵本入れを数えることができないくらい見たい。それが私の本当の夢なのかもしません。

生活にかかせない衣食住。自給自足が基本です。しかし実際は、スーパーで既に出来あがつてある惣菜を買いい、すぐに着られる洋服を買う…。楽な道へと進んでいます。

毎日は無理だと、自分で材料から食事を作り、自分で布から洋服を作る。そんな習慣が戻つてくることを願つています。私の祖母が手作り名人なのも、小さい頃から縫つていましたからです。祖母はちょうど私の年齢くらいの頃、洋裁学校に通つていました。毎日運針をし、洋服を縫つていたそうです。その経験があつたからこそ、私が選択で家庭科にしたことを伝えたとき、一番喜んでくれたのが祖母だったのだと思います。また、私が出来上がつた浴衣を見せたとき、一番ほめてくれたのも祖母でした。祖母は手作りの心を持つています。だからこそ、自分で洋服を作り、人の作品と共に喜び、感激することができる。そんな素晴らしい手作りの心。私も、手作りの心を持った人間になりたいです。そして、手作りの心を持つている祖母は、いつまでも私の憧れの的です。そんな祖母が作つてくれた洋服は、たとえ体が大きくなつても、収納スペースがなくなつたとしても、決して捨てるのではなく、宝物です。私は、そんな宝物がたくさんあることを誇りに思います。実際に選択家庭科で洋服や浴衣を縫うことは大変だつたけれど、そんな経験をしたからこそ、祖母への感謝の気持ちが生まれたのだと思います。いろいろな面で、選択家庭科にしたことは、貴重な体験ができ、少しだけ、成長したように思います。



将来

江東区立第二大島中学校 三年 原千恵

受験を迎えるとしている今、将来について本気で考え始めた。

私は今まで「夢」を持つていなかつた。毎日学校へ行つて勉強して、友達と話して、家に帰ればすぐ塾へ行つて…。そんなつまらない日々を淡々と過ごしていた。

でも、私は夢を見つけた。それからは生活の些細な事でも全てが大事な経験へと変わっていく。一日にひとつは何か得ることがあり、毎日が勉強である。

その私の夢というのは「精神科医」になること。なぜその職業に就きたいと思ったのか。それには大きく分けて二つの要因がある。

ひとつは友だちが神経症になつたことである。いつからだか、学校へなかなか来なくなつた。毎日一緒にいるからとも不安だつた。

神経症の名前を聞いても意味なんて知らなかつた。だからすぐに治るものだと思つた。

しかし、良くなるどころか休む日が多くなり、どんどん悪くなつていつた。そんな日が続いて、私は自分を責めるようになつっていた。どうして何もできないのだろう。どうして何も言つてあげられないのだろう。でもその度に私が強くいなきやいけないんだと思つた。

学校へ來ても授業に出ることは少なかつた。だから、一日の授業を全て受けることが出来た時には二人で喜んだ。二、三日学校を休まなかつた時には次の日も頑張ろうと励ました。思うように何もできなくて無力さを感じた時には、二人して泣いた。当たり前のことでも一つ一つが喜びだつた。きっとお互いが支え合つてきたんだろうと思う。

徐々に回復し、今では前の元気さを取り戻している。どうして治つたのか知らないけど元気な姿を見て安心した。

「いつもそばにいてくれてありがとう。」

この言葉を聞いた時、涙が止まらなかつた。こんな私でも誰かの為に何かをしてあげられたのかな。感謝の気持ちを持つてもらえるのかな。そう思えて嬉しかつた。

誰もが強くいる。誰もが笑顔でいる。それは難しいことかもしれない。でも誰かの為に強くいる。誰かの為に笑顔でいる。これならできるかもしれないと思つた。

ふたつめは支えてくれる人の大きさがわかつたこと。私がどうしても辛いとき、支えてくれた人がいた。それまでは特別に仲が良いというわけでもなく普通の友達だつた人。でも私が一番辛いときに一番最初に気付いてくれた人。心配してくれて、泣きながら怒つてくれて、全てを理解してくれた人。いつのまにか、かけがえのない存在になつていた。私はこの友達に何度も支えられてきた。支えてくれる人がいるだけでまた頑張ろうと思えるようになつた。

真っすぐにひたすら前に進む強さ、真っすぐ過ぎてぶつかつてばかりの不器用さはいつまでも私の憧れであり、守りたいものもある。

この二つの要因が私の夢へとつながった。

では、その夢のために今の自分には何ができるのだろうか。それは普段から思いやりを持ち、相手のことを理解することから始まると思う。都合の良い言葉じゃなくて、言葉にしなくても行動で示してみたい。それが一番嬉しくもあり、安心することだから。

つい思つてることをすぐに口に出してしまこともあるけれど、一度落ち着いて言葉を選ぶことも大事なことだと思う。

働くというのは自分一人の問題ではない。社会に関わることである。だから自覚と責任を持つことを忘れてはいけない。今のこの気持ちをこれから先、大切にしていきたい。そしていつかきっと夢を実現させる。

M y D r e a m

目黒区立第八中学校 三年
芦 野 さつき

先生、電車の運転手、医者、警察官、政治家、サッカー選手、そして女優。私たちは将来の「夢」というものをもっている。みんながそれ頗つてている夢だ。この社会で自分が願つた夢が叶つた人もいるが叶わなかつた人もいると思う。でも、子供も大人も老人も夢をもつてているのだ。

私の夢は女優さんになることだ。中学の部活で演劇部に入部して、その楽しさを知つた。他のみんなもこうして夢が決

まっていくのかなあ。そんな事を思いながら、私は将来、自分が女優になつている姿を想像しては微笑んだ。

もちろん、この私の夢が現実となるか、理想だけで終わつてしまふかなんてわからない。誰も知らない。なぜなら、自分の将来は自分で築きあげていくのだから。

「自分の将来の職業は何かなあ。十年後は何してるかなあ。将来の職業は自分に合つてゐるかなあ。楽しんでいるかなあ」と私も含め、世界中の人々がこのように夢について語つてゐる。私はそう思つていた。そう信じていた。ある本を読むまでは…。

中学二年の時、ある写真が目に留まつた。それはある本の表紙で、たくさんの子どもが、畑みたいな所で何かの作業をしている写真だつた。私は中を覗いた。本を読んだ直後、私は言葉にならないほどの驚きを感じた。

その写真の子どもたちは、お菓子のチョコの原料となるカカオ豆を収穫しているのだ。みんな、ぐつたりとした顔をしていた。この子供たちは子どもの時からやりたくもない職業をしているのだと知つた。私と同じように「夢」は持つてないのだろうか。将来の職業について考へていないのである。本には、「僕達の夢なんてないよ。あるのはこの苦しい現実。」というそこで働いている男の子の言葉が刻まれていた。なぜ、同じ子供でも夢をもつてゐる子供ともつてない子供がいるのか。不思議でたまらなかつた。その子供達には、「遊びたい」や「勉強したい」という夢だけはもつていてもらいたい。他にも、子どもの頃から、ごみ捨て場で鉄のごみを拾つてそれを売るという職業をしてゐる人もいた。まだまだ未熟で小

さくて、筋肉もろくについていない子供が働いてると思うと、胸が苦しくなる。今、私たちは普通に暮らしていくてもいいのかと思う。

私は職業とは、必ず大人になつたらやつて、イヤになつたら転職して……というものだと思っていた。しかし、仕事したくない。けれど、しないと生きていけないという子供たちが世界にたくさんいると知つて、私は将来やる職業に必死に取り組もうと決心した。やりたくなくても仕事をしている人がいるのに、自由に職業選択できる私たちが怠けてどうする?!と思う。だから、今、仕事なんてヤダなあと思っている二一トたちには、力力才畠の子供たちやごみ捨て場の人のこと少しでも考えて頭の隅に置いておいてほしい。そして「やる気」を出してもらいたい。

「夢」。それは世界中の誰もがもつてゐるモノ。具体的な夢でも、抽象的な夢でも、みんな平等にもつてゐると思う。その夢は叶つたって、叶わなくたつていいんだ。夢をもつていることに大きな意味があるのでないか。

「夢」というゴールを目指して歩んでいけばいい。ゴールテープをきれなくともゴールを目指して歩んで最高の人生を歩んでいけばいい。そのことに意味がある。途中でより道したつていいと思う。そのより道が人生を築きあげていくための良い材料となるはずだ。

ぜひ、貧しい子供にも夢をもつてもらいたい。好きな職業をできないのは辛いかもしない。でも夢があることで少しでも前向きになつてもらえればいいと思う。

本当にこんなにたくさんの職業が並ぶ日本は、正直すごい

と思う。その中から自分に合う職業をさがし、貧しい子供たちの分まで頑張っていきたい。

人間が生きる上で大切な三原則

目黒区立第八中学校 三年
角田大地

人間が生きる、生活するのに大切なことは「衣」「食」「住」の三つだと思います。この三つを教えてくれるのが家庭科そのものです。

まず「衣」とは体にまとう服のことです。昔の服に対する意識の多くは、冬の寒さから身を守るためにものだつたと思われます。しかし現在では個性はもちろんのこと、社会的慣習、所属集団を表わすのにも役立つてることを知りました。今まで、服を購入の際「自分に似合うだろうか」「予算は足りるのか」「サイズは大丈夫だろうか」という程度のことしか考へない私でしたが、家庭科の授業を通じて少し変わったことがあります。服についているラベルの取り扱い絵表示を見るようになつたのです。「素材に化学繊維は使われているのか」「家でも手軽に洗えるだろうか」など、様々なことも考えた上で服を選び購入します。又、アイロンがけは素材によつて、高温なのか、中温なのか、それとも低温で行なう方が良いのかを判断します。それに洗濯するときは、手洗い、洗濯機、クリーニング、どの方法が適切なのか自分で考えたりすることができるようになりました。そして、授業の中で印象に

残っているのが、ハーフパンツ作りです。一枚の布が立体になりしつかりとはけるズボンになつたときは、ちょっととした感動でした。ここで学んだこともまた日常生活の中で少し活かされていて、取れてしまつた制服のボタンぐらいなら、自分ですぐ付け直すようになりました。

次に「食」です。食べることは生命にとって最も重要なものの一つです。調理実習から主に学んだことは、食事は体づくりに大切なことで、ただ食べるだけでは意味がなく、栄養バランスをしつかり考えなければならないということです。そして、何と言つても、家族そろつて楽しく食事をするのが一つのポイントであることも教わりました。

このごろ、外国はもちろん、国内での食品問題、又それに関する事件などが多く、テレビで騒がれています。このようにニュースからも、加工食品や食品添加物、食品の保存などについて、確かな知識が必要だと改めて感じさせられました。

毎日の食事や調理実習から、少しでも料理ができれば役に立つなと私は思い始めました。そこで、時間があるときは自分で昼食ぐらいは作ろうと思ったのですが、なかなか実行できませんでした。それはインスタント食品やレトルト食品といった、とても便利なものがあるからです。しかし、これらの食品についての知識も既に学んでおり、決して体に良いとは言えないとぐらいは知っています。だから、食生活を見直すこと自分たちの健康にとつて、大切なことだと思います。

最後は「住」についてです。家は暑さや寒さ、日差しや雨から私たちを守ってくれます。住まい方は家族の人数や構成などによってそれぞれ異なると思います。又、住まいは家族

全員が安心できて、安全に日々を過ごせる場であるべきです。

しかし、それをおびやかすのが地震です。大きな地震であれば、家が全壊したり、地割れが起きたりと危険なことばかりです。日本は地震の多い国であり、関東はいつ大きな地震が来てもおかしくないそうです。だからこそ、常に地震のことを気にかけていなければいけないと思います。家は、食事をしたり、テレビを見たり、寝たりする場でもあります。けれど、人間が家を建てる一番の理由は自分たちを危険から避けるためなのではないでしょうか。このように、普段の生活の中では気が付かない、住まいの本来の理由を授業を通して私は教わりました。

「衣」「食」「住」の知識や技術は、人間が生きていく上で欠かせないものであると実感しました。授業をしていて、意外と家庭科は嫌いではなく、むしろちょっとした興味を持つている自分を発見することができました。家庭科は、少しづつ成長していく自分を感じることができますばらしい教科だと思います。

私らしい恩返し

目黒区立第八中学校 三年

中 島 秀 晃

私の両親は共働きをしています。だから私は、学童保育に通い、家に帰つても誰もいない毎日を過ごしていました。自分では、「こんななんじやろくな大人にはなれないだろ」と思い

ながら、親の帰りが遅いことにイライラしているうちに、とうとう小学校生活も終わるころになつていきました。

そんなある日、私は母と一緒に母が仕事をしている学校に行きました。そこで見たのは、休むひまもなく働いている母でした。休むのは昼休みだけで、それ以外はどこかしらに行つていて、やつと帰ってきたと思つたらパソコンをし始めてしまいます。私がいることを忘れていたと思つてしまふくらいでした。そして帰つてから気がついてみれば、実は私が疲れていました。

こういうのが普通であると知つたのはもつとあとのことでしたが、大人になればこの現実を受けとめないといけないのがイヤになりました。そして、「今の学校生活をもつと楽しめなきやいけないんだなあ」と考へると同時に、「将来は自分のやりたいことをして生活していきたいな」と思いました。こうして考えていくうちに、自分の未来について興味を持つようになり、「何でもできる」と過信していた自分がどんどん変わつていきました。「あれは難しいな、これはちょっとおもしろそうだな」と、未来の自分に一步ずつ近づいているのが自分でわかりました。

そして、今度は父のしている仕事現場を見る機会がありました。父は建築業関係の仕事をしていて、この日は事務的な作業でしたがいつもはお客様人と交渉をしています。そして父も、これといって休むことはなく、お昼に外に出て飯を食つたことが唯一の休憩だったような気がします。父の仕事をしている姿は家にいるときと違い、とても熱心で楽しそうでした。「この仕事に気持ちを込めている」という職人心と、「家

が一番のリラックスするところだ」という気持ちを読み取ることができました。その夜から、私は父に対しても文句を言わないようになりました。唯一体を休めることのできる家の中で、また私によつて悩ますのは、いけないことだつたからです。一人とも家ではソファなどで寝てることが多く、「疲れているんだなあ」と思つてよく気を遣つています。そんな時は兄弟で洗い物をしたりして両親に協力しています。そして私はこの二人の仕事ぶりを見て、考え方が大人になつたよう思います。

しかし、いくら仕事が忙しいからといって子供の面倒を見る時間を少なくするのはどうかと思います。たまたま私が親の働いている現場を見たからこうして気持ちが変わつたわけで、もし何もせずに過ごしていたら、今ごろは大変なことになつていた気がします。私は学童保育には通つていましたが、あまり常識があるほうだとは言えませんでした。なぜなら、物心がつくころには、両親が昼から夕方にかけて家にいなかつたからです。あのままだつたなら、何も知らない社会人になり、やがてワーキングプアになり、最後はニートになつていきました。

こうやつて悪いことを考へているからこそ、私は両親に感謝しているのだと思います。そういう意味では両親が共働きをしていてよかつたのかもしれません。そもそもどちらかが働いていて、一方が働いていなかつたとしても、それはそれで別の気持ちが生まれていたように感じました。ですが今後、高齢化していく社会で、「仕事を持つこと」がいかに大切かを知るために、こうしていろいろな現場に自らの足で行き、

肌で感じて何かを得ることが大事だと思います。

私はこの体験を通じて、「仕事を選ぶこと」と「その仕事を楽しむこと」を学びました。よく使う言葉ですが、今度は私たちが働いて、親に恩返しをしなければなりません。有言実行、私は一人の社会人として親に恩返しをするでしょう。

豊かな生活のために

目黒区立第八中学校 三年
町 田 茗

一年生のころから技術・家庭科の授業を受けてきて、様々な生活に役立つ知識を身に付けていける、なくてはならない教科だと思っています。特に、家庭科は読んで字のごとく家庭での生活に直接関係しているので実用的です。一年生のころはエプロン作りからはじまり、二年生ではハーフパンツを作りました。

裁縫は、家庭科の授業がなかつたらまつたくと言つて良いほどする機会がありません。

だから私にとって、中でもハーフパンツは大作でした。一枚の布切れから形を作りあげるのは最初に思つたよりも大変でしたが、完成したときの達成感も最初に思つていたより大きいものでした。そして、そのとき達成感とともに、家庭科ではただ家事などを習うだけでなく、家庭での生活を楽しく豊かにするための知識を習うのだと思いました。

ここまで主に家庭科の中でも「衣」の部分についてでし

た。というのは二年生の時、家庭科の先生が「家庭科には衣食住という三本柱がある」と説明していたことが印象的だからです。確かに、「衣」は裁縫、「食」は料理、「住」は住環境についてで、どれも生活を支えるのにかかせない三本柱だと思います。

そこで次は「食」についてです。衣・食・住の中でも特にかかることが多いのが、この「食」だと思います。調理実習では今までにけんちん汁やギョウザを作りました。特にけんちん汁は、野菜の切り方など料理の基本を学ぶ良い機会でした。このように、もちろん実習も参考になりましたが、栄養バランスに関することのように教室での授業も勉強になりました。家でもやろうと思えばできる実習とは違つて、学校での家庭科の授業ならではだと思います。家庭科の「食」という部分だと調理実習が先に思ひうかんでしまいがちですが、学校で習うような正しい知識があるのと無いのとでは、実際に料理をする時にずいぶん違うことでしょう。そのような知識を生かしてこそ、調理実習もより意味のあるものになるのかもしれません。

同じようなことが「住」の分野にもいえると思います。私は家庭科というと「衣」や「食」を先に思ひうかべてしまふのですが、それら二つと同じくらい「住」も大切な分野なのです。毎日の生活を過ごす上で、おいしい食事や清潔な衣服があつても家の中の環境が整つていなければ、快適な暮らしはできません。部屋の中の明るさ、風通し、整理整頓、どれも簡単なことです、家庭科の授業では改めてそれら当たり前のことの大切さを実感することができます。そしてまた、

この分野は技術ともつながりがあることにも気づきました。

きたいです。

例えれば家具を作つたり、パソコンを使つたりすることが、より快適で便利な住環境を作るのに必要だからです。技術と家庭科は毎日の生活を過ごしやすくするという点でつながっているのだと思います。

さて、衣・食・住の三本柱の他にもう一つ忘れてはならない大事な分野があります。それは保育です。この分野は先に述べた「三本柱」のすべてにかかわるものだと思います。

赤ちゃんには、どのような服を着せたら良いか、何を食べさせたら良いか、どのような家の環境が良いのか、という風にです。そして、特にこの分野では印象的な授業があります。すでに子供を育てたことのある教育実習生の方が、子育てに関する自らの経験を話してくださったことです。それは、どんな苦労があったのか、どうしても子育てのつらさにたえられなかつたときはどうしたのか、赤ちゃんがとつた思いがけない行動などでした。

その内容は、子供を育てた人でなければ語れないようなおはなしで、その人の子育てに対する想いがとてもよく伝わってきました。

きっと私を育ててくれた母も同じような想いをしたのだと思うと、感謝の気持ちを忘れないでいようと改めて思います。家庭という一番身近なところからスタートして、生活の中で必要な知識を身につけていき、そこでもまた新たなつながりを見つけることで、さらに生活を豊かにしていくのが家庭科の授業だと思います。これから習うことも前に習ったことも色々な体験を通してさらに深め、しっかりと自分のものにしてい

自然は嘘をつかない

杉並区立東原中学校 二年

和久井彬実

七月九日～十二日の四日間、私は職場体験で、Sさんという農家に行きました。担当してくれたのは、Sさんという優しい人でした。七月二日、事前打ち合わせの日、私達は待ち合わせにすれ違いがあり、予定時間より約四十分も遅れて着いてしまったにもかかわらず、Sさんは笑って許してくれました。私達は、Sさんが優しそうな人だったので、安心して、職場体験の日がとても楽しみでした。

当日、職場に着いて、仕事が始まるとな、Sさんは「ゆっくりでいいよ」と、何度も言ってくれました。私達の勤務時間は午前中だけだったので、「ゆっくりでいい」と言われたからといって、ゆっくりしていてはいけないと思い、一生懸命、一鉢一鉢に肥料を置いていきました。しかし、そうやって急ぐと、肥料を台の下の取れない所に落としてしまったりして、自分の能力を把握するのは、大切なことだと思いました。でも、こんな私達でも、ビニールハウス一つの中のブルーベリーの鉢にすべて肥料を置くことができて、どんな大変なことで、も、眞面目にやれば必ず終わるということを実感しました。

その後、Sさんに質問をしました。「この仕事のいいところは何ですか?」Sさんは「自然は人と違つて嘘をつかないから、手をかければそれだけ応えてくれる」と言いました。こ

の言葉は、今でも私の心に残っています。もともと植物が好きだった私は、植物への興味が深まりました。そして、残り三日間の体験を悔いのないように過ごそうと思いました。

二日目と三日目は、私達は植え替える仕事を手伝わせていました。苗が真っすぐに立つように注意することが必要でした。最初は土をこぼしたり、根を崩してしまったりと、いろいろと失敗はありましたが、だんだん慣れていくつて、翌日の三日目にはその作業が楽しくなっていました。「意外と単純作業でも、楽しむことはできるんだ」と、働いているうちに実感していました。

最終日、前半は一日目と同じ肥料置きをしました。今回はビニールハウスの外の苗でした。私達は、最終日なんだからしっかりと働くこと、一生懸命に置きました。肥料置きが終わると植え替えの続きをやりました。この作業も今日で終わりと思うと、なんだか寂しくなりました。でも、四日間、悔いのないよう働くことができたと思います。とても疲れたけれど、農業はやりがいのある仕事です。私は、将来、農業に関する仕事につきたいと、以前から思っていました。今回の体験で、農業の大変さも教わって、将来に少し近づけたと思います。

後日、私達はSさんの所へ、四日間のお礼に行きました。その時、Sさんは、「あなた達が植え替えてくれたブルーベリーは、全部元気に育っているよ。」と教えてくれました。私は、そのことを聞いて「頑張って良かった」と、充実感を感じました。体験中、Sさんはこんなことも言っていました。「春、ブルーベリーの真っ白な花が畑中に咲く時は、仕事のやりが

働くことの楽しさ

杉並区立中瀬中学校 二年

大 谷 み ゆ

「おはようございます。今日からよろしくお願ひします。」店に入つてからの第一声はこの言葉でした。また、この言葉で私達の職場体験は始まりました。E豆腐店の方はとても優しく、一気に緊張がほぐれました。

一日目、まず最初に仕事の説明を受けました。最初の日はほとんどそうじばかりでした。外のそらじ、ガラスふき、洗い物、中のそらじ、店番などで一日目は終わりました。これ

らは、私が考えていた以外の、しかしその仕事を続けていく上での大切な一部であると思いました。その日はほとんど食べ物は扱わせてもらえなかつたけれど失敗をしなかつたのでよかつたと思いました。厳しい仕事ばかりだつたけれど終わるとなぜかすごく達成感がありました。

二日目、やっぱり色々できないと仕事はできないけれど、一日目よりは仕事はふえました。でも仕事に関しての質問をするのを忘れて、シールをはる位置を間違えてしまい注意されてしまいました。「頑張っても失敗してしまった時もある」と分かっていてもくやしかつたので、次の日からは、仕事の手順を家で確認していきました。

三日目からは、接客も仕事もなれてきて、スムーズに動けるようになりました。しかも、食べ物も扱わせてもらえるようになりました。しかも、食べ物も扱わせてもらえるようになり、一気に楽しくなりました。お客様に笑ってもらえることがうれしくて、接客を笑顔でしたり、お客様と会話ををするようになりました。初めての接客で二日間くらい緊張していたのに、三日目にはその緊張がうそのようになくなり、「お客様ん来ないかな」、「もっと話したい」などとすごく自分がわくわくしていることに気がつきました。

四日目、五日目からは、きかなくてもできる仕事がふえ、失敗もなくなりました。自分が店の人たちと一緒に、社会人として働けているのがうれしくなりました。

私がこの店で体験させていただいて一番うれしかつたことは、店の人に「大谷さん達がいて助かるな」と言つてもらえたことです。この言葉をきいて、「自分達がいてめいわくではなかつたのだ」と思えてうれしくなりました。また頑張ろう

という気持ちにもなりました。

また職場体験をして勉強になつたことは、自分の将来についてもつと深く考えられたことと、接客という初めての体験ができたことです。この体験を通してたくさんのことを考えるようになりました。本物の社会人と一緒に仕事をして前よりは少し、自分が大人になつたのではないかなくと思いました。

今、私には将来パテシエになりたいという目標があります。今回の職場体験は、パテシエ以外に自分にどんな職業が合っているのかということを考えるきっかけになりました。

職場体験をしていて一つ疑問に思ったことがあります。それは、体験先の方たちが、すごく生き生きと楽しそうに働いていて、「どうしてそんなに楽しそうなのか?」という疑問です。体験中、「仕事は厳しいものなのに、なぜ楽しそうにしていられるのか?」、「働くということは、そんなに楽しいことなのかな?」とずっと考えていました。だけど自分の仕事を生き生きと楽しんでやることはすごいことだと思います。これから自分の将来のことを見つけていきたいと思います。



体験をして

豊島区立千川中学校 二年

笠原亜美

私は、職場体験やボランティア活動などに行つてきました。職場体験では、本屋さんに行きました。いつも客としてしか行かないのに、裏の仕事がたくさんあり驚きました。商品の本などが汚れてしまわないように、透明のカバーを一つ一つ、手作業でかけたり、人気のある本は目のつくところに配置していました。お客様が気持ちよく買いに来れ、また来てくれるように工夫しているのだなとわかりました。

売り場でお客様とすれちがつたときに、素通りしてしまって、不快な思いをさせてしまうので、あいさつを行つていました。私は最初、聞こえない程小さな声でのあいさつしかできなかつたけれど、慣れてくると大きな声であいさつをすることがきました。笑顔であいさつに答えてくれる人もいてうれしかつたです。

お客様と接する仕事をやってみて、私が接客業をすることになつたら、きちんと仕事をこなせるのか不安になりました。でも、接客業は直接お客様と触れ合えるので楽しかつたです。難しい内容の仕事が自分にまわってきたとしても、その仕事に挑戦することで一回りも二回りも成長でき、大人になつても学ぶことがたくさんあるんだなと感じました。

ボランティア活動では、保育園と手話サークル、特別養護老人ホームに行つてきました。

保育園では、園児たちの遊び相手やご飯、おやつ、昼寝の準備をしました。子供が好きなので、簡単だと思つていましたが、自分だけ楽しんでも保育士という仕事にはならないのだとわかりました。園児がけがをしないように見守るなど、気を付けなければいけないことがたくさんあり、保育士という仕事は緊張感をもつて取り組んでいるのだと感じました。着替えのときは、自分でできる子は自分でやらなくては園児のためにならないので、どこまで手伝つていいのか、区別が難しかつたです。

園児たちの笑顔にいやされながらできるこの仕事は、園児に教えられて気付くことも多く、毎日が新鮮に思えるのではなかつたけれど、慣れてくると大きな声であいさつをすることができました。笑顔であいさつに答えてくれる人もいてうれしかつたです。

手話サークルにも参加し、手話や聴覚障害の方の大変さを学びました。手話をするときには、しゃべりながらやることによって、口の動きでわかつてもらえるということを教えてもらい驚きました。表情も大切で、下を向きながら手話をしても伝わりづらいのだとわかりました。それから聴覚障害の方々は家でインターフォンが鳴つてもわからず、後ろから自転車や車のクラクションを鳴らされてもわからないので、全部を目で確かめながら生活していく大変なんだろうなと思いました。

特別養護老人ホームにボランティアとして行つた理由は、将来の夢を看護師になつて老人ホームで働くかなと考えているからです。

老人ホームには、車いす生活の人たちがたくさんいました。少しでも役に立ちたいと思い、食事の配膳やお話相手、一緒

に散歩などをしました。色々な方がいる老人ホームでは、人と接することが得意ではない方もいて大変でした。寝たままお風呂に入れる設備も見ました。ベッドみたいなものに寝かされ、お風呂の上に移動すると、お風呂が上に上がってきてお湯につかれるという仕組みになつていて一番びっくりしました。

日本は高齢化社会だから、老人ホームでは人手が足りなくなつてしまふのではないかと考え、改めて看護師になりたいと思いました。

様々なところにボランティアに行き、その場所で役に立ったかどうかはわからぬけれど、体験したことによつて、考え方や見方も変わり、世界が広がつたと思います。この夏休みは充実したものになり、よかつたです。もつと色々なところでボランティア活動に参加し、社会にはどんな仕事や活動があるのか知りたいと思います。

職場体験を終えて

練馬区立関中学校 二年
井 上 芽

私の将来の夢は保育士になることです。そこで、職場体験の体験先を選ぶにあたつて、私は迷うことなく、保育園を希望しました。

私の母は保育士です。夕食を食べながらの話題は、その日あつた保育園での楽しい出来事や、可愛らしい子ども達の様

子をとても楽しげに話してくれます。小さい頃から、そんな母の話を聞くのが私は大好きでした。それと同時に、保育士になりたいという夢もどんどん膨らんでいきました。そして、体験先に決まつたのが母の勤め先である保育園です。

私がそこで学びたかったのは、保育士の具体的な仕事内容や、子ども達との接し方です。

初日の朝は、緊張や不安で心がいっぱいのまま門をくぐりました。けれども、優しい笑顔の園長先生や、いろいろな保育士の方々に、暖かい言葉を掛けて頂くうちに、緊張が少しずつほぐれていきました。

私が入つたクラスは、園児十七名、保育士三名の二歳児クラスです。クラスに入つてすぐは、子ども達に声も掛けられず、ただ立つてゐるしかできませんでした。そんな私の足元に、遊んでいた子の何人かが駆け寄り、

「お姉さん、一緒に遊ぼう。」

と、声を掛け手を引いてくれました。その子ども達のお陰で、それ以降、私はいろいろな園児と話をしたり、遊んだりすることができるようになりました。

その日はまだ一日目だったので、どんな仕事をしているのかも、何をお手伝いすれば良いかも分かりませんでした。ただ立つていて、言わされたことをするだけで積極的になれませんでした。ただ帰りに、体験日誌に記入をして頂いている時、「明日は、今日声を掛けられなかつた子達にも、積極的に声を掛けてあげてね。」

と担当の先生に言つて頂き、とても嬉しく思うと同時に、

明日は頑張ろうと思いました。

二日目は、積極的になろうと決心して挑みました。まずは、一日目に話し掛けられなかつた、遠くの方で遊んでいる子に声を掛けみていました。静かに遊びながらも、やつぱり気になつていたようで、声を掛けでみたら、恥ずかしがりながらも私と話をしてくれました。

前日は体験できなかつた仕事もさせてもらい、とても良い体験ができました。

振り返ると、二日目は一日目よりは積極的にできたと思います。先生に分からぬ所の質問もできました。積極的になることはとても大切だと思いました。

今回の職場体験で学んだことは、一人一人を大切にすることです。このことは、保育士以外の職業にも言えることだと思います。例えば、私が職場体験をさせてもらった保育園では、夜寝るのが遅くなつてしまつという子を、お昼寝からみんなよりも早めに起こしてあげるなど、一人一人を大切にしている様子がよく分かりました。仕事は、相手がいないと成り立たない事なので、とっても大事なことだと思います。今回の職場体験は、私達にいろいろなことを教えてくれました。一人一人を大切にすること、自分で積極的に行動すること、一生懸命働くことの大変さ、つらさ、そして楽しさや面白さ…。職場体験で学んだことを胸に、将来に向かつて歩んでいきたいと思います。

職場体験で感じた事

練馬区立閔中学校 二年

南 部 悠 里

総合の学習で、職場を訪問して仕事を体験させて頂く、『職場体験』がありました。

私は、獣医師に憧れているので、動物病院を二日間の体験先に選びました。

憧れの職業を体験する事ができるのは、とてもうれしくて、楽しみでした。訪問する前の私には、そういう気持ちしかありませんでした。

動物病院はあくまで病院でした。苦しんでいる犬やネコを見て楽しいだけじゃないんだと改めて感じました。私達は病院の中を案内していただきました。私が驚いたのは、聞いた事もない名前の薬が、棚にところせましと並んでいた事です。これ程の種類の薬を使い分けるのは大変そうだな、と思いました。

朝は、入院している動物達の健康チェックから始まります。体温を測つたり、体重を量つたり、それぞれの子の悪い所を診たりしていました。私達は診察台の上をふく仕事をしました。動物の毛をすべてふき取るのは難しかつたです。私達はその仕事しかしていなかつたけど、病院の人達は他の仕事をやりながら、診察が終わつたのを見計らつて台をふいていました。私は、目の前にある仕事だけではなく、周りを見て動く事が大切と思いました。

その日には手術があり、私達は見学させて頂きました。手術の前にはエコーという、よく妊婦さんに使われる超音波をあてて体の中を調べる機械で、手術をうける犬の心臓を調べていました。もし心臓に異常があると手術ができないそうです。エコーで調べた物が画面にうつるのですが、私にはただ白と黒の模様が動いている様にしか見えませんでした。手術が始まる時、すごく緊張しました。獣医さんが、「初めて見る人でたまに貧血をおこす人がいるんだよ。」と言っていたのりますます怖くなりました。血がすごくたくさん出たらどうしようかと心配でした。手術は一時間程でした。初めて手術を見て、私は驚きました。ほとんど血が出ていなくて、獣医さんは手際よく器用に済ませていました。イメージしていた物とは全くちがいました。私が抱いていた不安や心配は一気に消え去り、獣医さん達がすごくかつこよくて感動しました。

そしてこの後、午後の診察が無事終わり、私達の職場体験

一日目が終了しました。

二日目、私達が病院につくと、昨日までケージの中にいた犬が居なくなっていて、代わりにお塩が入っていました。一日目に見た時、とても苦しそうだった犬が亡くなっています。話を聞くと、安楽死させたと言つていきました。その時は飼い主さんの事を考えました。私が小さい頃、飼っていたペットが死んでしまい、とても悲しかった事を覚えていました。同じように、この子の家族もとてもつらいだろうと思い、悲しくなりました。

しかし、動物病院はいつも通りに動きます。この日もほぼ同じ流れでした。その日は、動物達のゴハンについて教えて

頂きました。病院なので、全員に同じ食事を与える訳にはいきません。一匹一匹の状態に合った食事を与えます。薬の必要な子には一緒にゴハンに混せて与えていました。ペットショップなどはちがい、大変そうと思いました。

二日目の午後の診察が始まり、私達がここにいられる時間もしだいに短くなってきました。たった二日だけ入院している動物たちとは、もう会えないと思うとさみしくなりました。

この体験で私は、この仕事のことが良く分かったと同時に、命の尊さを感じる事ができました。獣医は、いつでも命と向き合う職業なので、きっと失敗は許されないだろうし、悲しい死に直面する事も少なくないと思います。でも、そんな職業だからこそ憧れました。この体験を終えてからは、さらに憧れが強くなりました。

職場体験で学んだこと

葛飾区立金町中学校 三年

松 本 華 奈

私は、中学二年生の時に、『デイサービス癒しの森』という所に職場体験に行きました。

デイサービスとは、在宅で寝たきりの高齢者など、身体上または精神上の支障があるために日常生活を営むのに支障がある人について、リフト付きワゴン車などで日帰り介護施設（デイサービスセンター）や老人ホーム、あるいは老人福祉

センターに送迎し、生活指導や健康チェック、入浴介助や給食などの提供をしたりする所です。

また、レクリエーションや、その他の日常生活上の世話をし、心身機能の維持を図るとともに、介護者の負担の軽減を図るなどの目的もあります。

私が、職場体験に行つた“デイサービス癒しの森”では、

健康チェックをしてから入浴介助が行われていたり、リハビリのためにぬり絵や折り紙をしていたり、かけ算や割り算の問題を解いたり、お茶を飲みながら会話をしている人達もいました。みんなとても楽しそうに見えました。

デイサービスに来て私が最初に体験したことは、入浴の後の高齢者の髪を乾かすことでした。今まで他人の髪を乾かしてあげるなんてやつたことがなかつたので、頭が熱くなりすぎて火傷をさせないように緊張しました。終わつてから、ふと「どうして両手が動かせるのにやつてもらつているんだろう」と考えました。人は歳をとると体の筋肉や体力が衰えてきたり、動作がゆっくりになつたりするから、重いドライヤーを何分間も持つていられなかつたり、皮膚が弱くなつていることや感覚も鈍くなつているために火傷をしやすかつたり、体力や免疫力がおちてゐるために、早く乾かさないと風邪をひいてしまつたりするかもしれないなどと考えてきました。

また、かけ算や割り算などの計算の丸つけもやらせてもらいました。私達にとつてその計算は、とつても簡単なものだつたし、高齢者にとつても、若い時は簡単に解けただろうと思つた。私達にとつてその計算は、とつても簡単なものだつた。けれど間違つても多くありました。歳をとるにつれて頭の回転も鈍くなることもあつたり、もの覚えが悪くなつたり、もの

忘れをするようになつたりすることも実感しました。でも、かけ算や割り算などの計算を解くことによつて、考えることから頭の回転が鈍くなるのを防ぐことにつながつたり、字を書くことによつて指のリハビリにもつながつてゐると思うし、頭を使うことによつて認知症の予防にもつながつてゐるのだと思いました。

それから、手や指のリハビリのために折り紙などを使つて作品を作つてゐるようでした。私も、折り紙でコスモスを作ることを一緒にやらせてもらいました。みんなでコスモスを作るのでに、指先がうまく動かせる人とそうでない人がいるために、工程を何組かに分けてやつてきました。できる人ばかりが作れたらうまくできない人は悲しいだらうし、葉が作れても花までは作れない人もいるけれど、一緒に一つの作品を作ることはいいことだと思うし、作品の一部分だけ協力して作ることはいいことだと思いました。私は、左手が動かなくて、右手も動きにくく、指先もゆっくりしか動かなくなつてゐるお婆さんを介助しながら一緒に折り紙をしました。その人は、耳も聞こえにくくなつていて、普通に話しかけても聞こえず、なかなかわかつてもらえなかつたけど、大きな声でゆつくり、はつきりと話したら理解してもらえたのでうれしかつたです。動作もゆつくりだつたので時間はかかつたけど、花の部分を折り終わつた時は一緒に喜びました。

私は、職場体験をしたことで高齢者介護の大変さを感じました。人は歳をとることで、身体の機能が衰えてくることなど高齢者の特徴や、その特徴やベースに合わせてあげること

の大切さを学びました。

私の夢は看護師になることです。看護の場には、赤ちゃんや子供がいたり、成人している人から高齢者がいて、治療ができる人、手遅れで治療ができない人、障害をかかえている人などいろいろな状態の人がいて、その人に合わせた看護が必要になると思います。職場体験では高齢者の特徴を少しだけど理解することができて、自分でどうしたらいいのか考えながら行うことができたことは大変勉強になりました。これだけではなく、まだまだ学ばなくてはならないことはたくさんあるけど、大切なことに気づくことができたのでとつてもよい体験になりました。

た。「自分が将来、何をしたいのか」そう考えると、はつきり分からぬいし、何年後、何十年後の事なんてボヤーっとしている。「今私が決めた事で、この先の将来が決まるんだ」そう思うと、自分の事だけれど、ものすごく責任を感じる。両親が「高校決めなきや」とか塾の先生にも「志望校決まつた?」と聞かれるけれど、やっぱり目標がないから、心の中で「行ければどこでもいいよ」と言ってしまうのだ。

私 の 進 路

葛飾区立双葉中学校 三年

池 田 莉 子

最近、私は「大人はみんな今の職業や生き方に満足しているのかな」と思う時がある。その理由はたぶん、中学三年生になり、家でも学校でも塾でも、進路の話題が多いからだろう。

進路を決めるといつても、どう決めるのかよく分からぬい。学校での先生の進路についての話の中で「将来なりたい職業など、その先の進路の事も考えて高校を選ぶ」そんな選び方をするんだと知った。母にも「何になりたいの?」と聞かれた。「こんないきなり将来の事を考えるなんて無理だ」と思つ

一つは看護師だ。母もやつてゐる仕事で、母がてきぱきと働いている姿や、患者さんに頼りにされてる姿を見た時に、かっこいいなと思ったからだ。母だけでなく、私は今まで一度入院した事がある。その時は、とても寂しくて心細かった。でも、ボタンを押すと、すぐに看護師さんが駆けつけてくれるのでとても心強く、嬉しかった。小学五年生の入院の時に

出会つた看護師さんは、私に「看護師つていいな」と思われてくれたもう一人の人だ。ずっと私についていてくれた実習生のお姉さんで、いつもニコニコしてて、明るい人だつた。入院はいやだつたけれど、楽しかつたし、その看護師さんがいてくれて本当に良かつたと思えた。病気やケガをしてる

時はとても不安だ。だから、母やあの時の看護師さんのように少しでも不安をなくし、明るく、患者さん的心を理解できる看護師になりたい。そして心の支えになればいいと思つていて。母は看護師になる進路や看護の話をよくしてくれる。母は、私がこの仕事をする事をきっと喜ぶだろう。この仕事は安定しているし、資格をもつていれば、母のようにお母さんはになってからまた、仕事を始める事ができる。また、生活中でも知識は役立つ。そういう事を知っているからだろう。もちろん私もこの仕事に文句はない。

でも私には、もう一つやりたい仕事がある。それは、動物介在福祉士だ。これは、小学生の高学年の時に知つた仕事で、動物と人のどちらとも関わる事ができるので、私にとってはやりがいがありそうな仕事なのだ。この仕事は、老人ホームや医療施設などで、動物とのふれあいを通して心のケアをする仕事だ。動物とふれあうのは楽しくて落ちつく。言葉の通じない動物が、人間の助けになるのはすごい事なんだと思っている。今、飼い主のいない動物たちは、何も悪くないのにガス室などで処分されている。その動物たちだって、生きて人間と仲よくできると思うのだ。人間だけでなく、動物の救いにもなれるかもしれない。動物の嫌いな人もいるので、決して簡単な仕事ではないと思う。そして、安定もしていないだろう。でも、この仕事はやりがいがあるはずだし、すごい仕事だと思う。

そんな中、私はこの夏に二つの職場を体験させてもらつた。看護体験と保育ボランティア。この二つを通して、仕事をする楽しさやすばらしさ、達成感を知つた。そして、それと同

時に、仕事の辛さ、難かしさ、厳しさも知つた。二つの職場はどちらも、命を預かっている仕事のため、他の仕事以上に責任をもつて働くなくてはいけない。人と接する分、神経をはりめぐらして、相手の事を常に考えている。そのため、ほんの少しの時間だつたが、終わるといつも足は棒のようだつた。半端な気持ちでは、絶対に仕事は続かないだろう。だから今私は、この大事な時にしつかり考えて、悔いのない進路に進みたいと思う。

今はまだ「あの時、この進路を選んでよかつた。」と言えるかは分からぬが、そう言えるために今しつかり考える時なんだと思う。まず私は、自分をしつかり見つけられる高校を探す。その生活の中で未来の自分を見つけても、遅くはないと思う。

かかわりの大切さ

葛飾区立青戸中学校 三年
井 上 知 美

私は、今年の夏休みに、初めてボランティアという体験をしました。その体験をしようと思ったきっかけは一ヶ月くらい前、友達の言つた一言でした。「夏休みに行く保育園のボランティア、すごく待ち遠しいんだ。」今までだつたら、受け流していたと思うのに、保育園でボランティアができるという事に関心がありました。なぜなら、昨年の職場体験で保育園を選び、とてもいい経験となつたからです。そんな事もあつ

て、私はボランティアをしようと決めました。小さな子が好きだから、という理由だけではなく、実は私は人とかかわることが苦手で、そのため保育園のボランティアという体験を通して少しでも苦手をなくせたらと思っていました。

そして、夏休みに入り、待ちに待つていたボランティアの日になりました。朝の八時三十分から五時までの約一日がかりです。期待と不安があつた私は、時間よりも早めに着いてしまいました。すると早速、保育園の先生が鍵を開けて迎え入れてくれました。私があいさつをすると、「これからお願ひしますね。」と優しく声をかけて下さり、少し安心しました。最初の日は、私は四才児のクラスを担当することになりました。朝早い中、子供達はすでに何人も来ていました。初めて何をすればいいか分からなくてとまどう私に、保育園の先生は「楽しく子供達と遊んで下さい。」と笑顔で教えてくれました。そのおかげもあって、だんだんと一緒に遊ぶ事に慣れときました。クラスの子は元気で人なつこく、いつでも笑顔であふれています。保育園の一日の生活は遊び、プールや食事、お昼寝、清掃などと休む暇もありません。そのため最初で流れが分からなかつたせいか、時間が過ぎるのが長く感じ、疲れる事もありました。そんな中、特に印象深く残っているのは、子供達と接するどの先生にも笑顔がたえなかつた事です。子供達のあの元気は、先生方の笑顔から來るのかなあとと思いました。

そして、二日目。初日より少しペースに慣れてきたので、なるべく自分から積極的にかかわっていこうと思つていました。私が立ちながら子供達と遊びをしていると、先生はアド

バイスをしてくれました。「立ちながら見て遊ぶのもいいけど、まずは子供達の目線で何でもやるといいよ。」と。最初は、その意味が分かりませんでしたが、時間がたつうちにそれは、子供達の目線で接することが大事なんだと分かりました。そうすると、子供達も自分のことを身近に感じてくれ自然と遊びを入れた氣がしました。本を読んだり、積木をしたり、会話をしたり、好きな事を自由にする子供達の表情は楽しそうに見えました。それは、子供達の目線近くにいなければ分からぬことだと改めて感じ、先生の言葉がしみじみと心にしました。三日間はとても短いものでした。クラスの子が「また来てね。明日も来るんでしょ。」と言つてくれると、名残り惜しい気持ちでいっぱいになりました。そうして、このボランティアの三日間は終わりました。

私が、この体験から学んだことは、人と接してかかわっていくのはとても大切だということです。人見知りで最初は知らない人と話すのは苦手だったけれど、先生方や子供達が笑顔で話してくれる事で、なんだかそれまで重かつた気持ちが自然に和らぐ気がしました。そして何より、保育園の子の笑顔はいつも輝いていました。それを支えている先生方の責任感、行動力、笑顔の力をボランティアの三日間を通して学びました。人とかかわる事は、新しい発見もあり自分にプラスになることが見つかりました。

私の進み方

葛飾区立東金町中学校 二年

久保木菜摘

小さい頃からずっと「将来の夢」について聞かれてきました。その時には、まだ小さかったので本やテレビで見た職業を夢にしていましたが、小学校中学年から私の考え方がだんだんと変わっていました。私は物心ついた時からずっと絵やイラストなどを描くのが好きだったので、小学生の時は漫画家になりたいなと思っていました。

中学生になると職業体験というものがあります。小学生の時は、ただ好きな事ができる職業を選んでいたけれど、職業体験を通して自分が合うと思った職業を見つけられたらと思いました。また職業体験以外にも、中学生になると「進路学習」というものがでてきました。小学生の頃は、全然考えてもいなかつた進路のことについて考えることになり、毎回聞かれる度に、どう答えていいか分からなくてすごく悩んでいました。

私は小学生の時は、ただ絵が好きだったという理由で漫画家になりたいと思っていたのですが、中学生になると「自分は何をしたいのか」が分からなくなってしまいました。好きなことを続けられるのか、それをやっていけるのか…と悩んでいます。ただ、私は出来るなら大学へ行つて就職して安定した生活を送りたいと思っています。

なぜならテレビのニュースでよく聞く「ニート」という言

葉があります。今でも社会問題になっています。働きもせず、親の苦労も知らず、仕事の苦労も達成感もない毎日を過ごしています。私はそんなつまらない日々を過ごすニートみたいになるのは嫌だなと思いました。

達成感のないつまらない毎日は嫌なのに、やりたいことが見つからない我がまま自分自身が考えていて分からなくなってしまった。周りのみんなは、自分がやりたいと思うものが決まっていて、私は「これだ」と思うものが分からずに不安になっていました。高校へ行つて、大学へ行つて、卒業して、その後の自分が想像できないのです。目標も何もない今までこのままズルズルと毎日を過ごしていたら、本当に最悪の選択「ニート」になってしまいそうで怖いのです。それでは、苦労してここまで自分を育ててくれた親に申し訳ないと思つていながらも目的のない自分に嫌気がさしてきました。

そう考えていると、ますます「大学に落ちたら何をすればいいのか」と、ネガティブな方向へ考えてしまい、どんどん落ちこんでしまい、泣きたくなってきました。やつてみたい、やりたいものはたくさんあるのに、ただ一つ決めるとなると分からなくなってしまうのです。

職業体験や経験の話を聞いて参考になつたけれど、自分が何をしたいのかが分からなかつたから話を聞いてもパツとしてしませんでした。

小さい時の夢は、パン屋さんから始まり、旅人、地方のアナウンサー、漫画家、ラジオのパーソナリティーと変わっていきましたが、どれも色々な所から影響されて「やってみたい」と思ったものばかりで、自分から「やりたい」とはあ

まり思っていませんでした。

こんな考え方できなかつた自分に、ある人が言いました。

それは、自分にとつて、とても身にしみる大切な言葉でした。

その人は私に「分からぬ」ではなくて、「見つけない」のです。

はなかと言いました。何をしたいか分からぬのではなくて、何をしたいか見つけようとしない。

この言葉は図星だなと思いました。

考えるだけでは前へ進まないから、自分自身が様々なものにふれて、見て、探さないと進まない。その人の言葉を聞いてよく分かりました。

それから私は、自分がやりたいと思ったもの、興味のあるものには、目を通してみようやつてみようと思い、行動しています。まだ探し始めですが興味のあることを調べるのが今はどつても楽しいです。

あの時、その言葉がなかつたら私はまだ立ち止まつたままで何も変わつてないと思います。「やりたいことがない」と言い訳するばかりで何も動いてなかつたでしょう。

考えて行動する時間はまだまだあるので、根気よく「これがいい」と思う職業、仕事を探して、将来の自分が充実した日々を送れる様に頑張りたいと思います。「やりたいことができる未来」を目指して。



力タチになつた自分

江戸川区立瑞江中学校 三年

坂 田 奈々美

「自分を皆に見てもらえる」

これが、私の考える、家庭科の魅力の一つだと思います。

家庭科では、大きく分けて、料理と裁縫を学びますが、私が特に好きなのは裁縫です。

「何かものを作る」とは、「自分の個性を形にする」と同じことだと思います。裁縫は、一目で全員の作品の違いがよく分かります。決まつた答えしかねない計算式や、分かる人にしか分からぬ書道などと違い、パッと見ただけで、その人の好きな色やジャンル、そして何をイメージしたのかまではつきりと分かります。また、作品を作つた人も皆のものを見て、「ここが可愛いな」「これは思いつかなかつた」と毎回成長することができます。

私は、中学一年生の時、エプロンを作りました。これは、学年で取り組む課題で、校内行事の展覧会で展示するものでした。これは、ただ型紙通りに作つて終わるだけでなく、ポケットの形や、エプロンのデザインを工夫することも課題の一つでした。

私がまず考えたのは「テーマ」です。ただ可愛いものを縫い付けていくだけでなく、統一感を出したかつたので、イメージを固めることにしました。思い浮かんだのは「新鮮な野菜」。最初は悩みました。多分、周りの友達はレースやボタンなど

を付けて、派手で可愛い作品を作るでしょう。「皆と同じようにしてようかな…」しかし、この気持ちは、ある時、一人の友達が言つた言葉で一変しました。「このデザイン、奈々美っぽい！」

自分らしいものを作るというのが、私の作品作りに対してのモットーでした。「何を迷つているんだ！」それからは、アイデアがどんどん出てきました。「ポケットは、バスケットに見立てて、大きく前に一つ作ろう。」「野菜は柔らかいイメージを出す為に、フェルトを手縫いで付けよう。」考えれば考える程楽しくなつてきて、『もっと工夫しよう』という気持ちが溢れきました。

しかし、イメージと実際に作るとでは、大きな違いがあります。何度も転びました。そんな時、助けてくれたのは先生でした。先生はプロですから、私達より何倍も知識を持っています。今までの経験からのアドバイスをたくさんしてくださりました。私はここで、「無理だ」と思うのは、先生が「これはさすがに無理かな」とおっしゃる時で、自分で判断して言うことではないと学びました。勝手に一人でアイデアを捨てるのではなく、まず相談することが大切だということを知りました。

作品は、自分の納得のいくものを作ることができました。

最初のイメージを少しづつ変えていきながら、形にしていきました。作りあげた時は、長いため息と共に、腹の底から大きな喜びが込み上がつきました。

その作品が展示された時、なんとなく「自分を出す」ということが分かった気がしました。

この作品は、区展に出品されることになりました。自分が選ばれた時、心から「頑張つて良かつた。最後まで諦めなくて良かった」と思いました。楽しみながら、心を込めて一針、一針縫つたものが、もっと大勢の人を見てもらえることが、どれだけ幸なことかを感じました。

今、私は、友達と二人で、好きなアイドルがある番組で着ている、誰もが知つていてる衣装を作っています。型紙もなく、写真だけを頼りに一から作つていくことはとても大変です。しかし、一度も「止めた」と思つたことはありません。楽しいからです。二人で協力して作つていき、先生も細かく丁寧に教えてくださるから。そして何より、作り終わった時のあの喜びを感じたいから。

この作品も、あのエプロンと同じ展覧会へ出品します。

そして、
『自分を皆さん見てもらう』のです。

働くことの喜び

江戸川区立瑞江中学校 三年

澤 田 清 香

私は、将来ヘアメイクアップアーティストになりたいと思っています。自分の手で、自由自在に表現できる人って憧れてます。

雑誌やTVなどで色々見るたびに、夢がふくらんでいきました。髪型もお化粧もその人の欠点をカバーして、なるべく目

立たなくし、良い所を全面に引き出せたらとても幸せだと思います。見た目の美しさも、もちろん大事ですが、内面からの美しさがプラス出来たら最高な出来ばえになると 思います。

私は、チャレンジ・ザ・ドリームで美容院を体験してきました。美容師さんはとても華やかに見えました。笑顔もとてもすてきでした。こうなるまでには、下積みの時代を経験しましたからこそ、喜びに変わるんだと思いました。朝は早くからタオルを洗って干し、ロットや液の準備をしたりしてました。お客様のカットした髪を美容師さんの邪魔にならないようにすばやく片付けたり、パーマをかける人のロットを渡すアシスタンントをしたりしていました。そのあい間に動きや技を観察して、良い所を学んでいけば絶対プラスになると思いました。そして人の注意は素直に受け止めてこそ、進歩していくんだなと思いました。

実習している間に、ドライヤーのかけ方やアイロンのかけ方、ロットの巻き方などを教わりました。さっそく家に帰つてから母と一緒に練習してみました。ドライヤーは人にかけまでは甘く考えていました。ただかけるのではなく、髪の流れにそつてかける事が大切なと思いました。どんな仕事も甘くないのはわかつていましたが、体験しないとわからない事は多いと思いました。実習の最終日、私はお客様にドライヤーをかける仕事を任せられました。母と一緒に練習したのに、お客様だと思って緊張して手がふるえていました。美容師さんに「数をこなせば大丈夫よ!!」と励されました。その一言で少し自信が持てました。また、夢に向つて一步前進したような気がしました。

ところで、私も美容院へ行く時はこうなりたいと思う人の切り抜きを持って行きますが、たいていは思うような髪型にならない事が多いです。でも、評判の良い美容師さんだと必ずそれに答えてくれるし、その人に合ったカットをアドバイスしてくれます。だから、出来上がりは最高です。家に帰つてからのお手入れもわかりやすく説明してくれます。今までは、上手く出来ない事が多かったです。美容師さんのアドバイス一つでこうも簡単にスタイルが決まるなんて思つてもいませんでした。今まで色々悩んでいた事がうそのように解決しました。これだつて、人の話を聞かなければそうはならなかつたと思うし、人間関係があつてこそ成り立つものだと思います。そういう気持ちが生まれなければ、次も来ようとは思わないと思います。

美容師という仕事は食事も不規則だし、おまけに立ち仕事ですが、お客様の笑顔を見ると何とも言えない気持ちになります。疲れもふつ飛んでしまうと思います。あいさつから始まって、笑顔で終わるつて感動しますよね。こんな素人な私にも、「ありがとうございます」と言つてもらつた時は少し恥かしかつたですが、とても嬉しかつたです。もちろん辛いこともたくさんあると思いますが、精一杯努力すればきっと報われる事がわかりました。何事も前向きにいこうと思います。そして夢が実現するように努力してがんばりたいです。

働くことの意義

筑波大学附属中学校 二年 鈴木千晶

私は昨年の冬、親戚の経営しているみかん畑の手伝いをさせてもらつた。

静岡県沼津市にある七代目へと継がれている広大な土地を利用したみかん畑だが、その分たくさんの労働力も必要とされ、私の想像以上に大変な仕事だつた。

詳しく話を聞かせてもらふと、静岡県は和歌山・愛媛の次にみかんの産地として知られ、年間平均気温一六、三℃で降水量二、二〇〇mmというみかん栽培に適した土地であるため昔から、みかん栽培がさかんに行われてきたのだそうだ。

親戚のみかん畑は、五十年以上の年月が経つてゐる。昔は、カマなどで草をけずつていたけれど、現在では草刈機を使うようになり、以前に比べ手間がかからなくなつたものの、みかんを育てることは労働力だけではなく、天候なども関係してきて大変なのだそうだ。

実際、私が職業体験させてもらつたのは、冬だつたため主にみかんの収穫を手伝わさせてもらつたが、みかんを収穫する作業だけでも大変な仕事だつた。みかんは手で引っ張れば採れるものだと思っていたが、はさみで枝を「バチン」と力強く切らなくてはならない。これを毎日続けていくことはすごいことだと思う。

そこで、長年みかん畑でがんばつてこれたのはどうしてな

のか、働くことの意味について尋ねてみた。すると、単純に「このみかんを食べた人がおいしいと言つてくれること、これが自分たちの力となってくれる。」そう答えてくれた。一人でも多くの人々に「おいしい」と言つてもらえるように、つらい仕事もがんばることができる。これは「働く」ということの一番大きな意義だと思った。

そして今年の夏、近くにある高齢者センターを見学させてもらつた。ここでは主に高齢者の介護を行つてゐる。働いている人の年齢は二十代～五十代とさまざまだが、それぞれ与えられた役割の中で一生懸命やつてゐる姿を見ることができた。一人一人の目線になつて相手の気持ちを考え接していくという精神面も考えなければいけない仕事なので、みかん畑とは全然違つた大変さがあることがよく伝わつてきた。

この仕事について話を聞いてみると、「自分が高齢者のためにやつたことによつてありがとうといわれる」と、この仕事をやつていてよかつたなと思います。自分一人ではできないことも、たくさん人の手をかりて成し遂げた時、働いている喜びを感じます。」そう言つてくれた。このことが、この人にとつて「働く」ことの意義なのだとそう感じた。

みかん畑は、たくさんの労働力を必要とし、その分たくさんの人に「おいしい」と言つてもらえるようなみかん作りをしている。介護の仕事は、体力が必要な場面もあるが高齢者のために相手の気持ちを考え、より暮らしやすい世の中の手伝いをしている。

私が実際に目にしたこの二つの仕事は、やつてゐることも大変さも全く違うが、共通して言えるのは違つた形でも必ず

社会の役に立っているということだ。少しオーバーな表現かもしれないが、その仕事を通してきっと社会の中の誰かが恩恵を受けていたり、助かつたりしている。これはすごいことなのだと思った。私は、「働く」ということは単にお金を稼ぐためだと思っていたが、実際は、自分の生きがいであつたり自己実現にもつながっている。

今回、この二つの仕事を通して学んだこと、それは「働く」ということは、社会と個人において大きな意義が存在するとということだ。このことを忘れずに、これから先の自分の将来に生かしていきたいと思う。

私の「未来の予想図」

愛國中学校 二年

稻毛佳子

—ここはイタリア。私は今姉と一緒にイタリアンレストランを開いています。日本人だけど英語も上手、料理もおいしいと現地の人に評判のお店のシェフです。焼きたてパンが自慢。私の念願の夢だった海外でお店を開くこと、それが叶つたのです。—

実は、これは私の「未来予想図」。

私が料理を好きになつたきっかけは、ただパンが好きだつたという理由からでした。小学四年生、私の家の近くにとても美味しいパン屋がありました。そのパンは、中がふわふとしていて外はパリッ、オリジナルパンがたくさんあり、選

ぶのが大変。特にクロワッサンが好きで冷めても固くならずバターの香りがするのです。

「おいしいパンを焼きたい」

それが私の出発点でした。

私は調理師になるために、高校に家政科がある附属中学に入学しました。姉も高校の家政科に通つていて、日本料理、

中華料理、西洋料理と三つの料理を勉強しています。姉は高校生になってから母の手伝いをよくするようになりました。母がいない時はご飯を作ってくれます。学校で教わったことをちゃんと活かしています。

私にとって姉の存在はとても大きく、影響を受けていると 思います。

姉は一昨年の夏から去年の夏までトルコに一年間留学しました。中三の夏にも海外研修旅行でアメリカに行つたという経験もあります。トルコから帰国した姉のお土産話の中で一番興味深かったのは料理の話。トルコ料理は香辛料がふんだんに使われていて日本では食べたことのない味がしたそうです。留学を終えて帰ってきた姉は、英語はペラペラ、トルコ語まで喋れるようになつていたのでびっくりしました。

姉が帰つてくると今度は我が家に留学生が来ました。アリツサという十六歳の女の子、ハワイからの留学生。一年間一緒に過ごしました。ある日アリツサがハワイ料理を作つてくれました。どんぶりにご飯を入れ、その上にハンバーグを載せ、ココナッツソースをかけます。珍しい味がしてその国その国の独特的の味付けがあることを知りました。

日本に居ながらにして異文化に触れるチャンスに恵まれて

備をして、私の「未来予想図」を実現したいと思います。

未来に輝くために

愛國中学校 二年

櫻 岡

恵

一母は言う辛い仕事が楽しいと

私は目指す母の輝きー

いましたが、さらに今年の夏には私も海外に行くことができました。江戸川区主催の「青少年の翼」に参加することができたのです。これは江戸川区在住の中高生に国際交流の機会を与えてくれるもので、私はニュージーランドに行き、ホームステイを体験しました。私が目標としていた英語力の向上は達成できませんでしたが、言葉は違つてもコミュニケーションがとれてすぐに仲良くなれるという発見がありました。料理に関しては日本とあまり変わらないのに驚きました。私が焼きそばを作つたところ大変喜ばれました。味付けが似ているようです。ただ昼食は日本とは違います。学校ではmorning teaといつて二时限目と三时限目の間にお菓子を食べる時間があります。そのせいか昼食は簡単で、リンゴ、ハムサンド、ヨーグルト、お菓子という感じであまりしつかり食べません。

これらの経験を通して海外、料理への興味はどんどん深まつていきました。そして外国でお店を開くという夢を持つようになりました。簡単なことではないと思います。まず言葉の問題、習慣の違い、味覚の違い。日本人の私が作る料理が外国人に受け入れてもらえるのか心配です。でも姉と一緒にできるかもしれない、といつても姉には話していませんが。勉強して力をつけてから相談しようと思つています。まず今の私がしなければならないのは英語の勉強。家政科に合格できるよう受験勉強もしなければなりません。それから憧れのイタリアについても理解を深めていきたいと思います。姉は栄養士の資格を取るために進学する予定です。私も同じコースを目指しています。夢を叶えるために今から準

母の日が近づいたある日のこと、母をテーマに短歌を詠むという課題が出ました。この形にするまでに、あれこれ言葉を置きかえて悩みながら完成させました。どんな言葉を使つたら自分の将来の夢や母の仕事についてぴたりと短く納めることができるだろうか、考えながら詠んだこの歌は私にとって大切な一首となりました。この短歌を母に見せると、少し照れ臭そうに

「辛いというか、眠いのよ。でもよくまとめられたわね。」と言つてくれました。この短歌を作ることを通して私は自分の将来と母の仕事について深く考えるようになりました。

私の将来の夢は、看護師です。私がまだ小さい頃の看護師のイメージは、いつも微笑んでいながら患者様とお話をする言わば「白衣の天使」と思つていました。看護師である母にその事を言うと、私のイメージとは少し掛け離れた答えが返つてきました。確かに微笑んだり、患者様とお話しするのですが元気になつて退院する人もいれば、生きるか死ぬかの息もできない状態の人も入院してきます。だから笑つてばかりい

られないのよ、と母は言つていました。その事を知り私はイメージとは全く違う過酷で大変な仕事なんだ、と驚きました。

思い起させば小学一年生の時に私は入院した事がありまし

た。幼い頃から喘息があつた私は年中発作を起こし、病院へ何度も通っていました。ある日、発作がピークに達した時私は入院する事になりました。高い熱が出ていたのでその時の記憶はありません。覚えているのは元気になつてからの事です。私のベッドの周りには四歳か五歳ぐらいの子供たちがかつたように感じました。それぞれベッドには、お母さんが

朝から夜まで付き添つていました。その時から母は仕事をしていたので仕事の合間を縫つてほぼ毎日、面会に来てくれました。私はとても嬉しかったのですが、すぐ帰ってしまう母を見ると少し寂しくなりました。昼間、母がいない時には祖母が毎日病院に来てくれていました。そんな時に一人の看護学生のお姉さんが私の担当になりました。お姉さんは毎日いろいろな物を持ってきてくれました。針金にテープを巻いて造花を作つたり、絵を描いたり楽しい事をたくさんしました。

今思えば小児科に実習に来ていた看護学生と分かるのですが、その時は一緒に遊んでくれたお姉さんのように感じました。

このような経験を通して私は、優しく患者様の看護ができ、母のように仕事もできぱきと行える看護師になりたいと思いました。

看護師という仕事は朝から夕方、夕方から深夜、深夜から朝という三交替で行われています。そのため、母は家に帰つて寝る時間や出勤する時間も日によって違います。忙しくても都合に合わせて私と過ごす時間を作ってくれます。過酷な

仕事なのにどうして続けていいけるのだろうか、実際に母に聞いてみると「看護の仕事を通じて人間として成長前進する事ができると信じているから。」と言つしていました。

今の医療現場は病院の医療システムによつて電子カルテと

いうコンピュータ化されたものが日常的に使われています。今から私はコンピュータを勉強して覚えていきたいと思います。又、様々な技術やコミュニケーションを学んでいく必要があると思います。

看護の原点は、患者様に触れて看る事なので国語力、読解力を身につける事が大切になつてくると思います。短歌に詠んだ「母の輝き」を目指して実現するにはかなりの努力や覚悟が必要になつてくると思います。しかし母が言つていたように、きっと看護の仕事は私を人間的に成長させ前進する事ができると信じ、目標に向かつて努力していきたいと思います。将来看護師になる夢に向かつて今、やるべき勉強を一生懸命頑張つていきたい、そう思っています。

私 の 夢

愛國中学校 三年

土 方 志 穂

私には将来の夢がたくさんありました。でもそのたくさんの中の夢のほとんどが、ただやつてみたい、楽しそう、などといった簡単な気持ちのものばかりでした。しかし、それは小学生の頃まで、中学生になつてからは、より具体的でしつかり

とした理由が明確になりました。そして私の夢はその夢一つにしばられ、私の人生は生き生きとした明るいものになりその夢に向かつて一直線となりました。

その夢とは、家で家族と一緒に自営業をする事です。何の自営業かというと、色々なものをお客様に喜んで食べていただきたり、飲んでいただくことの出来る飲食店を営みたいと思います。しかし、ただの飲食店ではなく、お客様が元気になる健康的なお店にしたいと思っています。

なぜこのようなお店にしたいか、これにはたくさんの理由があります。

私の家族は私も含めて皆料理をするので、温もりのある手料理を色々な人に食べてもらいたいのです。私は果物や野菜を混ぜたジュースが好きなので、そのジュースを作り、お客様に活力のある、そのおいしいジュースを飲ませてあげたいのです。そして、ジュースでも有名な飲食店にしたいと思っています。それから別に売る品物は、食べ物や飲み物のメニューの中から人気のあるものなどをパックにしたり、小さいペットボトルに入れたりします。これは、あまり時間のない忙しい人達に気軽に食べていただけよう、持ち帰りの出来るお弁当などを販売したいと思い、提案しました。しかしそのお弁当や飲み物だけでなく、野菜や果物のセットも販売したいと思います。今私の家ではガーデニングぐらいの小さな規模の畑ですが、そこで野菜や果物を栽培しています。その規模をもう少し拡大して今よりもっと多くの野菜や果物を栽培して、その野菜や果物をお弁当などと同じようにして、売りたいと思っています。

もちろんその野菜や果物を使った料理やジュースなどもメニューに入れたいと考えています。メニューに載つている全てのものが健康的で身体に良いものにしたいと思っています。

私がなぜ家で自営業を営みたいと思つたかというと、家族全員で楽しく働きたいからです。今私の母は家から徒歩で二、三分の所で働いています。ですから、すぐに会いに行く事が出来ます。朝は私の方が早く登校して、その一時間後ぐらいに母が会社へと出勤していきます。帰りは私と同じか、私が部活で遅くなってしまった時は家に帰るともう母は帰宅しています。

しかし母に比べて父は、朝五時ぐらいには家を出発し、帰りはだいたい夜中の十二時ぐらいです。時々九時頃や十時頃に帰宅することがありますが、父はとても疲れていて明日のためにと、早く寝てしまします。ですから休みの日ぐらいしか家族全員でゆっくりと過ごす時間がないのでとても残念です。

そこで私は家で、家族で自営業をしたいと思つたのです。私が思うに、家で自営業をするとなると、毎年仲の良い友達と家族ぐるみで行つている海やキャンプ・スキーなどの旅行にも行けなくなるでしょうし、もちろん日曜日だからと言つてお店を休みにするわけにもいかないので、残念な面もありますが、家族みんなでいつも一緒に居られると思えば、とても楽しいと思います。それにご近所の人や友達がお店に来てくれたとしても嬉しい気分になると思います。そこでお客様としてきてくれた皆が顔見知りになつてくれたら、私はもつと嬉しい気分になると思います。

私はこんな夢が実現するように、日頃から色々と努力をしています。

それは、普段からご飯の支度の時に料理の手伝いをたくさんして色々と学んだり、自分ですぐ作れるような簡単な料理を考えて実際に作って食べてみて、父や母に批評してもらったりしています。また、私は現在通っている愛国中学校を卒業したら、愛国高等学校の家政科に進学しようと思っています。愛国高等学校の家政科に進んで栄養の事・料理の事・その他の事もたくさん学んで、卒業と共に調理師の免許を取得し、みんなに愛されて信頼される人、お店であるように夢に続く道を一步一步しつかりと踏みしめて、ちゃんと夢を実現させたいと思います。

そして今までとは違い、真剣に叶えようと思っているこの夢が本当に実現したら、私はどんなに嬉しいか、想像するだけでも胸が高鳴ります。

それに今のこの私の夢と一緒に叶えようしてくれている父や母もすごく喜んでもくれると思います。父や母は頑張つてと言つてくれているかのように、色々とアドバイスをくれます。料理の事やお店を建てる時の事、そしてその夢を叶えるためにはどうしたら良いのかと言う事などです。

私は自分の夢なのに一緒に協力をしてくれている父や母に本当に感謝をしています。

私はこの夢をどんなことがあつてもあきらめず、時には周りの皆の手をかりて、真剣に頑張つていきます。

この夢は私一人だけの夢ではなく、一生懸命私を応援してくれている家族のみんなとの夢だと言う事を胸に、この夢を

叶えるという目標を見事達成し、いつか絶対に陰ながら応援をしてくれている父や母に恩返しをしたいと思います。

そしてその時に改めてちゃんと感謝の気持ちを伝えたいと思います。

